
スズランとマイナス

式織 檻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スズランとマイナス

【著者名】

NZコード

N8166D
式織 檻

【あらすじ】

”歩くマイナス極” 鞘河亜紀雄と精靈スズランが織り成す、なさそうでありそうで、やつぱりなさそうなお話。

プロローグ（前書き）

本作品は拙作「ESP部のある登場」及び「殺し屋殺しの藁人形」のネタバレを多少含みますので、ご注意ください。（ただし、本作と前述の2作品は趣向が異なりますので、必ずしもこれらの作品を先に読むことをお勧めするものではありません）

プロローグ

「ねえ、知つてル？ 実は精靈つて、この世界に本当に実在するんだヨ」

などといきなり言って、即刻その言葉のすべてを信じてくれる人など、一般的な日本社会においては皆無である。

万に一つ、初めから全部を本気にしてくれる人がいるかもしれないが、しかしその場合、むしろそんな人間の方が大多数的価値観からすればデンジャーな存在であり、そんな輩は残念ながらとても一般的な人だとは言えない。そのようなケースは例外中の例外であり、後悔しない友達付き合いをしたいのならば、もっと別の人を選択するべきである。

しかしだからと書いて、普通の学校の普通の友人を相手に、真顔を作つて前述のセリフなぞを言おうもんなら、たいがいは「何、それ？ どんなジョーク？」

などと、最初から冗談と決め付けられたり、「何だ、昨夜寝つきが悪かったのか？」などと、夢の話だと決め付けられたり、

「……何か悩みがあるなら、俺が相談に乗るぞ？」

などと、精神的病気の類を疑われたりするのがいいところだ。

真実だと言い張ろうもんならそれこそ奇人呼ばわりされかねないし、友人関係が危うくなるかもしれないし、もしかしたら大人から本気で心配される可能性だつてある。一般人の枠組みの中で生きて行きたいと思つている人間にとつて、どう転んでも想定外の未来しか待つていない。そのような未来を望まないのなら、冒頭のようなセリフは初めから口にしないのが吉である。

鞘河亞紀雄さやかわあきおが「それ」を隠しているのも、つまりはそういう

理由なのだ。

学業という名の一一種の牢獄から開放され、安堵感が辺りを覆いつくす放課後の教室にて、帰り支度をしている最中に、隣の席のクラスマイトが、

「おどぎ話やら何やらだと、昔からあつちこつちで精霊なんつーもんが語り継がれてるけどさ、ここまでその例が多いってことは、実際にそんなもんがいるのかね？」

なんていう話題を突拍子もなく運んできた場合でも、亜紀雄は躊躇なく、

「あはは、そんなもんあるわけないでシヨ」と笑い飛ばすようにしている。

実は、彼の右隣わずか三十センチ先に鎮座している、当高校の制服をまとった小麦色の散切り頭の女子生徒が、その精霊本人であるにも関わらず。

当の精霊たる少女 鞘河スズラン はと、亜紀雄のそこの辺の心情を十分に理解しているので、自分の存在を否定するそんな会話にも、

「そうですよ」

と、他人事のように愛想笑いを浮かべている。できた精霊だと言つても異論はないだろう。

このスズランという精霊。この世界に降り立つている理由が理由だけに、亜紀雄とほんの数時間だけでも離れることを頑なによじとせず、無論亜紀雄も亜紀雄で高校をそう何日も休むわけにも行かないでの、結果、スズランが学生として学校に通うことになったのである。

スズランには亜紀雄以外に身寄りはなく、また亜紀雄以外の誰かに身寄る意味も意義もないのに、必然的に亜紀雄の衣食住すべてについて周ることになつていて。彼らの級友達にしてみれば、亜紀雄を見れば必ずスズランも視界に入るし、スズランを視界に入れれば即ち亜紀雄の動向を眺めることになる。紐で繋がった飼い犬と飼

い主のよつなものだ。どちらが飼い主なのかという疑問は置いておくとして。

しかも、スズランが精霊であるということは周囲には完全に伏せられていて、スズランが亜紀雄にやたら着いて回っているその本当の理由を知るものは、他に誰一人いない。それはつまり、傍から見ればその昼夜問わず行動を共にしている様は、ただのオシドリ関係にしか見えないということである。

「では、亜紀雄様。そろそろ帰りましょうか。帰りに夕飯の買物をしたいのですが、メニューは何がよろしいですか？」

「……え？ あ、何でも……」

「そうですね。亜紀雄様は中華がお好きですから、チンジャオロースなどどうでしょう？ あ、亜紀雄様の嫌いなピーマンは、一応減らしておきますが、でも少しばかり嫌いませんよ。好き嫌いはよくないです」

「……え？ あ、ああ……」

「さ、行きましょう、亜紀雄様」

「わ、分かったから、あんまり腕を引っ張らないで、肘が変なところに」

「くそつ、亜紀雄っ！ 見せ付けんじゃねーつー！ くらえつ！」

「彼女いない歴＝年齢パーンチッ！」

「いたあつ！」

現在、亜紀雄は級友に羨ましがられ疎まれるには十分と言つが十二分を過ぎるような状況に甘んじて居るのである。

第一話「朝」　　その一

亞紀雄にとって、眠りから目覚める瞬間というのが、人生における唯一の至福のひと時である。

夢から目覚めたばかりの刹那。現実を現実と認識できずにはいる一瞬の混乱。これが夢なのか現実なのか、分からなくなる。この意識の空白がこの上なく心地いい。何者にも変えがたいほどに……代えがたいほどに……換えがたいほどに……気持ちいい。掛け値なしに、これこそが至福である。

この心地よさは、現実が受け入れがたいほど大きくなる。

あの苦痛も、あの困難も、あの後悔も、あの絶望も、すべてが夢だつたんじやないか？ 幻だつたんじやないか？ 現実ではなかつたんじやないか？ そう思う。そう思つてしまえる。

そう思うことで、わずかばかり心が楽になる。

ぐるりと現実世界の自分の身辺を見回してみても、安心できることなど一つも見つからない。目に入るすべてのものが自分のことを敵視し、否定し、攻撃し、嘲り、籠絡しようと虎視眈々と観察している。恵まれていれば舌打ちされ、恵まれていなければここぞばかりに叩かれる。被害妄想などではなく、経験則からそういう結論が導かれるのだ。そういう結論しか導かれないのだ。

輝かしい微笑の裏側で、毒づかれていたこと。

友情や愛情だと信じていたものが、完全なまやかしだったこと。

と。

人一倍的好意で接してみたが、拒絶されたこと。

頑なに守っていた自尊心を、恐ろしいほどに踏みつけられたこと。

そんな経験は数え切れないほどある。数えるのが馬鹿馬鹿しくなつて数えていないだけだ。むしろ今まで十六年間を生きていて、そんな経験しかない。そんな経験しか思い出せない。それ以外の記憶

が、脳に刻まれていない。

すべてがすべてが、敵だった。

そんな環境に晒されて、一体どうやって生きる希望を見出せと言うのだろうか？ 偽善者が謳う氣休めに似たキレイ事など、本当に無責任だと思つ。残念ながらこの世界は、自分が生き易いようにはできていない。なるようになつてできたといつ、ただそれだけ。それだけでしかなく、それだけでしかない。自分を救うのは自分だけ。自分が救うのは自分だけ。自分を慈しみ愛しむものなど何もない。自分を慈しみ愛しむものなど何もない。ある。そんなもの、最初から存在していない。

あるいは現実だけでなく、眠りについている最中だって同じだ。現実と切り離されているはずのその時間でさえ、悪夢に苛まれることなど多々ある。現実が荒んでいればいるほど、それに比例してあるいは対数的に 夢さえも荒んでいつてしまう。何の救いにもならない。夢は救いなどではないのだ。
だからこそ、だ。

だからこそ、亜紀雄は目覚める瞬間を至福と据えるのである。この一瞬だけ気持ちが軽くなる。心が軽くなる。頭が軽くなる。このひと時がなければ、自己などとに崩壊していただろう。それほどかのように、亜紀雄にとって重要な瞬間なのである。
だから、もう少しだけ、このままで

ガシャララーンッ

「きなり、耳をつぶさないよつのドリの音が鳴り響いた。

これは決して「ドリのよつな」ではなく、正真正銘のドリの音である。

日本国内の中流家庭が住むよつな家屋内でドリが鳴るなど通常は考えられないことであるが、しかし否定しようもなくこれはチャイニーズ・シンバルつまり、ドリの音であった。それを確認するのは、亜紀雄にとって造作もない。首を回して、部屋の入口の方に

田を向ければいいだけである。

そこには、右手首からドラの紐を垂らした、すでに制服に着替え終わっているスズランが立つており、

「亜紀雄様あ、朝ですよおー」

ガシャララーンッ

「う、うるさい！」

亜紀雄は飛び起きた。

「……く、何でドラなんか持ち出すんだ……！」

「だつて、亜紀雄様、フライパンにオタマとこつこんボでは、なかなか起きないんですもの」

ガシャララーンッ

「わ、分かつたから、もう鳴らすナ！」

耳を塞ぎながら声を張り上げる亜紀雄。

こんな朝っぱらから、しかも住宅街のど真ん中で大音量を奏でるのは近所迷惑だろうなんていうツッコミは、亜紀雄が昨日に済ませている。これに対するスズランの返しはとくに、亜紀雄の知らぬ間に壁に防音シートを満遍なく貼つてあるのだそうだ。言われて見回してみると、確かに壁の色が少し違っていた。元々白かった表面が、前日よりもいくらかクリーム色がかっている。

だからいくらかき鳴らしても平氣です」とスズランはにんまり笑顔で言つてきた。確かに感心するほどに用意がいいが、それよりも他に方法があつたのではないか？ 他に頑張ることがあつたのではないか？ 優先順位が間違つてるんじゃないのか？

亜紀雄の頭の中には、昨日もそして今現在も、そんな疑問が浮かんだ、浮かんでいる。しかし

「では、早く身支度してください。遅刻いたしますよ

そう言つてスズランはドラを抱えたまま部屋を出て、たつたかと階下へ降りていつてしまつた。甲高い鐘の音に耳を塞ぐのに忙しく、亜紀雄は完全にツッコむタイミングを逃した。昨日の一の舞である。枕元の目覚ましを持ち上げると、七時ジャスト。もう十分くらい

寝ていても余裕なはずだ 実際、一ヶ月前まで亜紀雄は七時十分にアラームを合わせていた が、すでに目は覚めてしまっている。今からもう一度布団にもぐつたところでもどろむことは叶わないだろうし、もう一度ドラを鳴らされるのは「免だ」。

亜紀雄はため息をつきながら立ち上がり、クローゼットを開いて制服を取り出した。

階段を降りてリビングに入ると、テーブルの上にはトーストとサラダ、コーンスープが並べられていた。

「あ、亜紀雄様。ようやく起きましたか」

入ってきた亜紀雄に気付いたスズランが、顔をこっちに向けながら言つてくる。

制服の上にエプロンといつてた。冷蔵庫の下の部屋をのぞいている姿勢である。当然の」とく、もつその腕にはドラは掛かっていない。どこかにしまったのだろう。亜紀雄は、学校から帰つてきたら即刻そのドラを見つけ処分することを脳内のスケジュール帳の今日の予定に加えた。

しかし、そんな亜紀雄の脳内秘書の動向など知る由もないスズランは、相変わらずの無邪氣な顔を浮かべながら冷蔵庫からヨーグルトを取り出し、ドアをぱたんと閉めて向き直つた。そして、取り出したカップを亜紀雄の目の前、テーブルの上にコトソッと置く。

「さ、早く食べてくださいまし」

そう言いながら、亜紀雄の指定席たる椅子を引くスズラン。その動作に促されるように、

「あ、ああ……」

亜紀雄は座つた。

トースト、ベーコンエッグ、サラダ、コーンスープと、亜紀雄の目の前には結構な質と量の朝食が並んでいる。一ヶ月前まではどうてい考えられないものだった。あの頃は毎朝トーストを焼いてマ-

ガリンを塗るだけ。栄養もへつたくれもなく、ただ昼間で腹が持てばいいというだけだつた。

ドリで起^ひこされたのは勘弁だが、こ^ひの利点もあることにはある。

はぐらかされたような気分になりながらも、幾分かの満足感を以つて亜紀雄は朝食に手を伸ばした。そしてたどたどしくも、パンやレタスを口に運んでいく。

多様な料理、多彩な味覚。

食事一つでもこれほどまでの快感を味わうことが出来るのか、と亜紀雄が感心してしまってほどだった。「朝食は一日のエネルギー源である」なんていう文句は家庭科教師が鬱陶しいくらいに言つていたが、その真実味を改めて実感してしまつ。口に入れるたびに脳が活発になつていいくのが、亜紀雄自身にもよく分かった。

朝食を食べ終わると、時間は七時四十分。そろそろ家を出ないと遅刻だ。

亜紀雄は、

「……さ、そろそろ行^ひこつ

と言いながら椅子から立ち上がつた。そして隣の椅子の上に置いてある鞄を手に取ろうとした時、

「あ、亜紀雄様。待つてください」

空いた皿をシンクへ運んでいたスズランが振り返る。

何で呼び止められたのか分からず、亜紀雄が棒立ちでつゝ立つていると、スズランは亜紀雄の皿の前まで近づいてきて、

「ネクタイが曲がつてますわよ」

と言つて首元に手を伸ばし、制服のネクタイをキュッキューと締め直した。

淀みないスズランの動作に、なすがままになる亜紀雄。

スズランの額を眼下数センチ先で眺めることになり、何とも歯がゆく気まずくなるが、首を押さえられてるので思うように顔が動かせない。どうにもこうにもならずに、亜紀雄が半ば困ったような

気分でスズランの緋のよつな髪を見つめていると、せせなくして首から手が離れて、

「はい、できましたわ。さあ、でかけましょつか」

と、ポンッと胸元を手の平で叩かれた。そしてスズランは目を細め、新婚の新妻でもそこまではできないだらうといつづらうの、愛おしむような微笑を亜紀雄に向けてくる。

亜紀雄は、やけに眩しいその笑顔を直視できず、「

「……は、早く行こう」

ときびつななく言つて、鞄を担いでそそぐれとコビングから出て行つた。

第一話「朝」　　その一

スズランが請負つている役目については、亜紀雄の世話をすること、ただそれだけである。

何でも、亜紀雄の曾々々祖父にスズランが大変お世話をなつたそうだ。礼を尽くさねば返せないほどの中。その恩を返すために、スズランはこの界に留まつてしているのである。

それほど大事な恩ならば、本来恩を受けた本人に返すのが筋だろう。

しかし、それは三百年前の話。この三百年の間精霊界に縛られたいたスズランは、つい一ヶ月前にようやくこの界に降りてくることができたのだが、本人が生きているわけもない。なので色々迷った挙句、その恩を受けた人の子孫たる鞆河亜紀雄のために身を粉にすることに決めたのである。

亜紀雄にとつては驚愕の惨事だった。

それはそうだろう。いきなり見ず知らずの女の子が玄関から尋ねてきて、

「初めてまして。これからあなた様のお世話をさせていただきます」とお辞儀されて、驚かないわけがない。

亜紀雄は最初、スズランを新手の勧誘か押し売りか、もしくは詐欺の類かと考えた。そして当然のようにろくに相手もせず、返答も早々にバタンと扉を閉め切つたのである。にこまで冷たくすれば、どんな強引な売り込みも引き下がるはず。経験上、亜紀雄はそういう予測をもつてそのような応対をしたのだった。

しかし、それは甘かった。

スズランのアタックは、犯罪のボーダーラインをまつたくと言つていいほど考えていないものだったのである。

玄関を閉め切つても窓を割つて進入してきたし、一一〇番しようとしたら電話線を切られだし、携帯電話を取り出したら粉々に割ら

れたし、近所に助けを呼ぼうと叫ぼうとしたら猿ぐつわよろしく口にタオルを詰め込まれたし、走って逃げようとしたら両手両足を縛られたし、それでも暴れたら背中から電気ショックのようなものを当てられた。納得したわけではなくむしろ要求を拒もうもんなら殺されるんじゃないかという恐怖に負け、結局亜紀雄はスズランを家に置くことを了承したのであった。

後になつてから、何であんな強引なことを、強盗歴四十年のプロでもこうはいかないだろうといつぶらこに手際よくやつてのけることができたのか聞いてみたところ、

「いえ、まあ、いきなり見ず知らずの精霊が押しかけてくれば、普通の方は驚くでしょうし、亜紀雄様も例外ではないでしょう。私もきちんとその辺りの常識はわきまえておりますので、亜紀雄様があのよつや行動に出る」とは十分予想できおりました。だからこそ私も私でそれに対する準備を万全にしていたに過ぎませぬ。全部当初の計画通りです」

と、スズランは困難なプロジェクトを如才なくやつてのけた敏腕の女性プロデューサーのように微笑んできた。確かにあそこまで読みきついていたのならそれはそれで素晴らしいことではあるが、やはり頑張ることは他にもあつただろう、と亜紀雄が思つたことは言つまでもない。

スズランの人となり（精霊となり？）が分かつてきた現在、今さら出て行ってくれと言つ気にもなれず、また同じ日に会う可能性もなくもなかつたので、結局スズランのお世話は継続中なのである。では、スズランの言つ「お世話」とは、具体的にどういったものなのか？

簡単に言えば、亜紀雄が快適に生活できるように働くことである。朝起こしたり、朝食や夕食を作つたり、掃除洗濯をしたり。それ以外にも何かないかと、常に亜紀雄の側を着いて回るのである。

だからこそ通学の電車にも、お供するよつた亜紀雄と一緒に

乗る。

亜紀雄とスズランは並んで座っている。

ロングシートの車両。その座席の中ほどに、二人は何をするでもなく収まっているのである。そして電車がゴトンッと揺れたびに体が傾いて、二人の肩がぶつかり、その感触に慌ててスズランがさつと体制を正す、というようなことを繰り返している。まるで付き合い始めたばかりのカップルのような、この上なく初々しい風景。亜紀雄のクラスメイトが悔しがつて地団駄を踏むようなシチュエーションである。

しかしながらそのツガイの片割れである亜紀雄は、隣のスズランよりも車両内の状況を気にしていた。

日本のどこでも見られるような一般的な車両であるが、しかし亜紀雄はこの上ない違和感を以つて周囲を見回している。ためすがめす観察している。そしてゆっくりと口を開き、澄ました表情で隣に座っているスズランの方に顔を向けて、

「……あのさ、スズラン？ 気になつてるんだけど……」

「は？ 何です、亜紀雄様？」

亜紀雄の方に向き直り、首をちょこんと傾けるスズラン。

亜紀雄はその口をやや突き出した表情に向かって、

「いや、あのさ、今つて朝の八時じゃん。それって、学生にとつては通学時間だし、社会人にとっても通勤時間なんだよね」

「ええ、そうですね。大勢の方が眠そうな顔で歩いていらっしゃいます」

「そう。つまり、電車とかバスとかはさ、一日で一番混む時間だと言つても過言ではないんだ。通勤ラッシュなんて言葉もあるくらいだし」

「ええ、その言葉は聞いたことがあります」

「でさ。僕たちが乗つてこの電車も例外じゃなくてサ。この路線の沿線には会社も学校も数え切れないほどあってさ、そこに属して

いる人の大多数がこの電車を利用するもんなんダ

「そうですね、だからこそこの路線も成り立っているのでしょう」

「……ええと、つまりね。以上のことを踏まえた上で聞きたいんだけどや」

亜紀雄はぐるっと車両内を見回し

「 何でこの車両、僕たち以外に誰も乗っていないノ?」

恐る恐るそんなことを聞いた。

「 だつて、おかしいでショ? 一ヶ月前までは、僕もぎゅうぎゅうに押しつぶされながらこの電車に乗つてたんだヨ。背広とドアの間に挟まれながらさ。なのにこの一ヶ月、人ごみどころか入つ子一人いないよ、僕ら以外。ほら、見て、隣の車両。あそこでは見覚えのあるオシクラ饅頭が繰り広げられてるヨ。みんな苦しそうな顔で電車に揺られてル。なのに、どうして僕らはこんな余裕で座つてられるノ? しかも ほら! あのサラリーマンの人! 何だから青ざめた顔でこっち見てるヨ! 何の人、あんな目で僕らを見てるノ? 何でみんな顔してるノ? 何でこっちの車両に移つてこないノ?」

「 ……そうですね。わざわざ自分の功績を説明するなど、家臣としては恥ずべき行為なのですが 」

スズランはうつむき加減で、

「 ですが、亜紀雄様が疑問に思うなら、お答えしないわけにはいきませんね。…………ええと、ほら、見てください。あの入り口のところ。両脇にお札が貼つてありますでしょ? あれにはですね、通つた人間を識別する機能がついておりまして、あそこでこの車両に乗つたのが我々なのか、それ以外なのか、判断しているのです」

「 やっぱり君だつたのか。…………というか、判断してどうじたの? それだけじゃ、他の人がこの車両を避ける理由には 」

「 亜紀雄様 」

スズランは、亜紀雄の言葉を遮るように口を開いてきた。そして目を伏せて、ふるふると首を横に振つて、

「……あなた様は、上に立つ者。我々を導く者。どうぞ前だけを見てお進みくださいまし。あなた様の先祖である隆久様も、それだけの風格を伴つて一国をまとめてらつしゃつたのですよ。あなた様も家臣のことなど気になさらず、『自分と、そして国のことだけを考えて生きてくださいまし。私も、あなた様に危険がないように、あなた様が安全に生活できるように、日々最良の選択をしていくに過ぎませぬ。だから、どうか私を信じてください。そしてどうぞ何も気にせずに、亜紀雄様の生活を送つてくださいまし』

「……い、いや。そう言われると逆に気になつて」

と、スズランの真剣な眼差しにたじろぐ亜紀雄。その圧力に負けるように上体をそらし、隣に置いてあつた鞄に腕をぶつけた時、

カラソツ

と、何かが床に落ちた音がした。

筆箱でもこぼれたのかと思って亜紀雄が振り返ると、床の上には携帯電話くらいの大きさの白い筐体　　いや、まさしくこのなき携帯電話の筐体であつた。亜紀雄が一瞬その判断を迷つたのも無理はないだろう。その携帯は、まるで高熱で溶けたかのように形が崩れていて、まるで燃やされたかのように表面が焦げていて、まるでハンマーで叩かれたかのようにあちらこちらが欠けていて、まるで高圧をかけられたかのように外形が歪んでいて、まるで刃で斬られたかのように刀傷がついていて、まるで電気ショックでショートしたかのように黒い煙を吐いていた。

何、これ？

この疑問の答えに対してもくらかの予見を持ちながら、亜紀雄は油が切れた機械のようにぎちぎちと首を回し、スズランの方を見る。

「…………」

目が合つたまま、固まる一人。三拍ほどそうした後、スズランは

妖しげほどのやたら満面の笑みを畠紀雄に向けてきて、
「どうぞ、気にせず！」
「こひれるカアーッ！」
とまあこんな風に、スズランは日々畠紀雄の世話をしている
のである。

第一話「ランチタイム」

亜紀雄にとって、食事というのは他者の命を消費する作業としか思えない。

そこには肉食も草食も関係なく、ただただ動物なり植物なりの命をもぎ取り、それを自分に吸収するだけである。生きようとする他者の願望を摘み取つて、自分のために吸収するのである。

つまり、他者を止めて自分を継続すること。

他者の生きようとするベクトルを遮つて、それを自分のために還元するのである。他者をわざわざ止めて……留めて……停めて……富めるのである。

果たしてこの人生に、そこまでの意味があるのであらうか？

この鞆河亜紀雄の人生は、他者を踏み台にしてまで継続する価値があるものなのだろうか？ 他者の生きようとする意向を遮つてまで、この人生は続かせるべきものなのだろうか？ それに値するだけの人生を送つていいのだろうか？

常日頃、亜紀雄の中にはそんな疑問が巣食つている。

他者から奪つたエネルギーを使って、自分は一体何をしただらうか？ 何を生み出しだらうか？ 何を獲ただらうか？ 何を作り出しただらうか？ これまでの半生を振り返つたところで、何も思い浮かばない、何一つ考え方がない。他者を踏み台にすることと等価のものなど、何一つ見つけた覚えはない。

だったら、なぜ自分は生きているのだろうか？

自分が一昨日、昨日、今日と生きている理由は？ 生きている目的は？ 生きている意味は？ 何もないんじゃないか？ 生きる意味なんてないんじゃないか？ もう、生きない方がいいんじゃないか？

なぜ自分は、わざわざ生きているのだろう？

その答えは、実は分かっている。分かりきっている。多分、何と

なくなるのだ。何となく死にたくないから、生きているだけなんだ。苦しみたくないから、痛いのが嫌だから、生きているだけなんだ。腹がすくから食事をするだけなんだ。そこに理由も目的も意味もないのだ。

何て自分勝手で、横暴で、無意味な存在なんだろう。

我ながら、本当にくだらない。こんな奴など、早く消えてしまつた方が世界のためだ。早く消えてしまつた方が、その分他の動物や植物が生きていけるはずだ。その方が世界にとって、すべてにとつて価値のあることだろう。意味のあることだろう。これ以上ないほど理解できる。

だけど、やっぱり

「くだらない存在であるからこそ、自分を止める勇気もないんだ。留められないんだ。停めることができないんだ。結局何となく、無意味に今日も生きていくんだ。」

「……もう、考えるのも嫌になつてきタ」

憑き物を払うように首を振りながら、亜紀雄はハアとため息をついた。

「……いいさ、ダメ人間はダメ人間らしく、怠惰に延命するのサ。どうせそれしかできないんだから……」

周囲の誰にも聞こえないくらいの大きさの声でそんなことを言つて、亜紀雄は机の脇にかかつている鞄の中に手を突っ込んだ。数秒モゾモゾやつた拳句にそこから取り出したのは、プラスチックのトレイ。上面には「弁当」と書かれた白い紙が輪ゴムで留められている。

これは、亜紀雄の昼食の弁当。今朝、駅前で買つてきたものである。

スズランが来てからの一ヶ月は、昼食もスズランお手製の弁当を持参していたのだが、今日は久しぶりに市販の弁当になつた。実は昨夜、夕飯の支度中にスズランがおかずを焦がしてしまい、弁当用に買つてあつた冷凍コロッケを夕飯として食べることになつたので

ある。そんなわけで次の日の弁当の中身がなくなってしまい、あれなく本日は店の弁当を買つてくることになつたのであつた。

これについてスズランは申し訳なさそうな顔でしきりにペコペコしていたが、亜紀雄にしてみればこちらの方が元来のメニューであり、感覚的には前の状態に戻つただけなので別段気にしてはいなかつた。スズランの弁当も美味ではあるが、たまには市販のものを食べるのもイレギュラーでいいだろう、くらいに思つてゐる。

とりあえずこの空腹をどうにかしよう。

そう思いながら、亜紀雄は紙のカバーを外し、中を覗いて

「あれっ？」

素つとん狂な声を上げた。そして皿を丸くして弁当の中身を覗ぐ。その表情には驚愕が浮かんでゐる。亜紀雄がそうなるのも無理ないだろう。なぜならその弁当箱の中には

ご飯が半分しか入つていないのである。

いや、それだけならここまで驚かなかつただろう。元々あの弁当屋があるべきな商売をしている可能性だってあるし、店員が純粋に量を間違えた可能性だってある。しかし亜紀雄がここまで驚いたのは、つまりはそれだけに留まらずに、

すべてのメニューが半分 よくて三分の一程度。
エビフライさえ半分で切られていて、おまけに歯形までついて
いる。

「…これは？」

高校入試で冥王星の軌道計算問題が出たくらいの呆然とした顔で、亜紀雄は手元の弁当を見下ろす。ためすがめす見回す。そしてゼンマイ仕掛けの人形のような動作でキリキリと首を回し、
「…ねえ、スズラン。僕の弁当がいつの間にか減つてるんだけど
……？」

亜紀雄の隣の席で、すでに弁当を食べていたスズランに尋ねた。

スズランは箸をぴたりと止め、亜紀雄の方を向いて、

「……へ、亜紀雄様の弁当が減っている?」

「うん、そう。ほら、見て」

そう言つて亜紀雄は自分の弁当箱を差し出した。無論これは自分の現状を知つてもらい、その後で一緒にこの謎について考えてもらおうとしたのである。こんな弁当箱を見れば誰だって驚く。スズランだって一緒に驚いてくれるだろう、一緒に原因を考えてくれるだろう、と思っていたのだが

「ああ、それは私が食べたのですよ」

スズランはけろつと言い放つた。

「……え? ええ! 君が?」

「はい、毒見も家臣の大切な職務ですから」

弁当付属のナップキンで口元を拭きながら、スズランは何ともなさそうに言つた。

「私が作るものならともかく、他者が作るものではその中身にいまいち信用が置けませぬから。先刻亜紀雄様がお手洗いに行つている間に済ませておきました。とりあえずその中には害のあるものは入つていないので、安心してお食べになつてください」

「……いや、お食べと言われても」

亜紀雄はくつきりと歯型が残つた沢庵を箸でつまみあげながら、「現代日本じゃ弁当屋が客の毒殺を企むなんてことはありえないんだから、わざわざそんなことしなくていいんだ。毒見なんて意味ないよ。これじゃ僕の弁当がただ単に減つっていくだけで……

「……って、あれ? 沢庵は端っこかじつてあるだけなのに、何でエビフライは七割がた食べられてんの?」

「え? いや、それは……」

「よく見ると、これ、毒見つて言つ割りに、やたらバランスが明らかにおかしいよ。シューーマイが確か四つ入つてたはずなのに、三つ

がかじられて、残りの一つが見当たらない。そのくせこいつのレタスはほんの少ししか食べてない…… ねえ、スズラン。

これ、まさか

「いや、何を疑つてらうしゃるのや、……」

「ちょっと、スズランの弁当も見せ つて、ああ！ ちよつ

と！ ハビの尻尾が僕のよう二つ多い。ちょっと、これどうこうと！ 毒見つていうわりに、偏りが激しくな

を逸らすノ？ 明らかに目も泳いでるし！ 目が丁になつてゐる！ ねえ、何で顔

大文字の丁！ もー、ちょっと、怒るよーつ！

ど、亜紀雄が椅子から立ち上がつた時、ふいに後方から、

「ねえ、鞠河君。ちょっとといい？」

女子生徒の声が聞こえてきた。

今取り込み中だから後にしてよ、と思いつつも亜紀雄が振り返ると、目の前にはプラスチックのトレイ。弁当箱が口を開いたのか、それにしちゃ澄んだ声だったと一瞬思ったが、そんなわけないと考え直し、亜紀雄はその箱を握っている主の方を見た。その声の主はセミロングの髪を耳下で外にはねた、寄り目がちなクラスマイト東香々美だつた。

亜紀雄に対してプラスチックボックスを差し出している香々美の姿勢に虚を着かれ、一旦言葉を飲み込んだ亜紀雄は、

「…………え？ 何？ 東さん」

「ちょっと、鞠河君に味見してもらいたくて」

そう言いながら、香々美はプラスチックボックスの蓋をぱかっと開けて、

「ほら、チヨコレート作ったの」

「チヨコレート？」

「そう。ほら、明日バレンタインじゃない」

言われて、亜紀雄は今日の日付を思い出す。 一月十三日。そしてこれに一を足せば、めでたく有名な記念日になる。亜紀雄は「ああ」と納得顔になり、次いでニンマリ顔になつて、

「え？ 何？ 手作り？ まさか、明日本命に渡すつもりなの？」
「うふふ、残念だけど違うよ。全部義理。お世話になつた人に配ろうと思つてゐる。それでね、手作りだから鞠河君に味見してもらおうと思つて」

そう言いながら、香々美はトレイの中身を見せてきて、

「ほら、綺麗でしょ」

「……へえ、すごいね」

亜紀雄は中身をまじまじと見た。ボックスの中には赤、青、黄色、緑、オレンジ、白、黒、茶色、ピンク、金色、銀色に色付けされた、一口大の球形のチョコが箱いっぱいに入つてゐる。

「カラフルだね」

「うん。色々試したの。……あ、もちろん味もそれぞれ違つてるんだよ？」

香々美は粒を一つ一つ指差していく、

「このピンクはイチゴ、黄色はバナナ、オレンジはみかん、白はミルク、赤はトマト」

「……と、トマト？ それはまた、斬新だね……」

「うふふ、そうでしょう？ でね、この緑はキャベツ、青はナスで

」

「キャベツ？ ナス？」

「この茶色は十円玉、金色は五円玉、銀色は百円玉を」

「ちょ、ちょっと待つて！ 色をコンプリートしたいあまり方向がおかしくなつてル！ しかも犯罪！」

「大丈夫、絶対おいしいから。概ね」

「概ねつて絶対じゃないじゃん！ お金の味なんて想像できないし

……

「もー、ぐちぐち言わないでとりあえず食べてよ」

ぐいっと押し付けるようにボックスを差し出してくる香々美。目の前の九色のチョコレートを見てその味を想像し、その想像だけで気持ち悪くなつてゐる亜紀雄はちらつと隣のズズランの方を見て、

「……そ、そうだ！ スズラン、僕が食べる前にまずは毒見してく
れないと。ね？ ほら、僕に何か害があるか分からないから、ま
ずは君が」

「そんな、亜紀雄様、いけません」
スズランは首を横に振り、非難するような目で亜紀雄を見ながら、
「他人様が手すから作ってくださったものに毒見だなんて、失礼す
ぎます」

「貴様！ さつき何と言つていたあ！」

「それに私、お腹がぽんぽんです。これ以上食べたら太つてしまい
ます」

精靈が太る力アーツ！

と叫びかけて、亜紀雄は黙つた。そんなこと、教室で言つわけに
はいかない。叫んだところでバカにされて笑い者になるのがオチだ。
そこまでを見越してのスズランの発言だわ！ 相変わらず変なところ
で先見の明が立つていて。

何も言えなくなつて「ぐぬぬ」と歯軋りをしている亜紀雄に、

「ほら、鞠河君。食べて」

と、香々美はさらに前へとボックスを差し出してきた。近づいて
くるチョコレート群。亜紀雄は何とかこの状況を振り切る方法はな
いかと、入学試験以来だろう、頭を高速フル回転。そして何とか口
を開き、

「……そ、そういうのは、やつぱりさ、気の置けない人に頼んだら
？ ほら、僕と東さんって、席は隣だけど、たまにしか話さないじ
やない？ そういう間柄だと変に気を使っちゃうし。そうなると、
ちゃんとしたアドバイスもできないよ。だからさ、もっと東さんに
ずばずばものが言えるような近しい人に」

「私に気を使わない人？ でも、そんな人……」

口をへの字にして考え込む香々美。知り合いを順々に頭に浮かべ
ていっているのだろう、しばらくうんうん言つていたが、急に閃い
たように頭の上で豆電球を瞬かせ、

「……そうだ！ いた、私に生意気な人！ …… 小林君だ！」

そう言つて後方へと方向転換し、香々美は教室の後ろの方の席へと行つてしまつた。

その後、しばらくして教室の後方で始まつた、

「ねえ、小林君。チョコの味見してくれない？ してくれたら小林君にも明日あげるから」

「へ？ 味見？ いや、まあ、それくらいなら つて、何だ、この妙にカラフルなチョコは！ 合成着色料よりも色合いが気味悪い……」

「つべこべ言わず食え！」

「うおっ、ちょ、やめる、無理矢理口に」

といふ会話を背中で聞きつつ、犠牲となつた小林雑音の冥福を祈りながら、亜紀雄は歯形のついたエビフライを口に運び始めた。

自分にしか出来ない」ととこりのは、ここの世にこゝつあるの
だらうか？

そもそも、そんなものが存在するのだろうか？

ここの疑問は、亞紀雄が中学の頃　あるいはそれ以前　から、
ずっと自問自答しているものである。

例えばスズランの場合は、掃除、洗濯を如才なくこなすし、料理
の腕前も結構なものである。頑張りどころを間違えではいるが、そ
の他諸々のことでも割と気が利くし、性格も比較的温和。成績も優
秀である。

それに加えてミテクレもなかなかなもので、学校に来てからの一
ヶ月、彼女がもらった恋文の数は百を下らない（スズランはその手
紙をすべて亞紀雄に見せてくるので、亞紀雄は必然的にその数を把
握することになっている）。亞紀雄が

「誰かいい人がいたら付き合ってみたら？」

と何気なく提案してみたところ、一週間くらい前からめでたく陸
上部のキャップテンである三年生と交際を始めたらしい。最近は彼と
昼食をとったりしているそうだ（この事實を知ったクラスの男子達
は、存外そうな顔を亞紀雄に向けてきた）。このことからも分かる
通り、スズランに異性を楽しませる性質があることは、もはや疑い
ようのない事実だろう。これは彼女が彼女たる意義の一つと言える。
あるいは、東香々美にしてもそうだ。その真っ直ぐな性格は、大
変親しみやすいといたところで贅美されている。その上成績は学
年トップテンで、クラスでの彼女のの人気は男女共に高い。香々美は
クラス　　引いては学年において、なくてはならない存在とし
て収まっているのである。

小林雑音だつて、そのやたら落ち着いた性格は、将来いつぱしの
人間になることを期待させるに足るものだ。体育の授業の最中、グ

ラウンドに野犬が侵入してきた時も、他の生徒が逃げ惑う中、彼だけはまつたく動じずに黙々と長距離走をこなしていた。良い悪いはともかくとして、雑音がそのうち何かしらで名を馳せることになるのは、亜紀雄にも断言できる。

そう、別に日本一とか世界一とか、そういう技能だけを求めているわけではない。

自分が周囲の誰にでも誇れるものを言っているかどうかである。

例えば亜紀雄は、一年間アメリカに留学していたおかげで日常会話程度の英語は話せる。しかし、別にネイティブほどペラペラというわけではない。この高校には帰国子女が三人いて、彼らに比べれば亜紀雄の英語力など石ころのようなものだ。それに、難儀な文法問題ともなればテストで上位のやつには到底敵わないし、加えて言うなら、英語が話せたところで日本における日常では活かすべくもない。亜紀雄がこのスキルを他人に誇る機会はまつたくないのである。

それはつまり、この能力は亜紀雄がここにいる理由にはならない、ということ。

他に、他に何かないのだろうか？ 亜紀雄が人に誇れるものは？ 人より秀でているものは？

勉強？

否。テストの順位など、下から数えた方が断然早い。
運動？

否。亜紀雄は今まで体育の授業以外のスポーツをしたことがない。

趣味？

否。彼の趣味は寝ること、それだけである。

特技？

否。部活にも入らず、それ以外の活動を何もしない亜紀雄に

何があるはずもない。

性格？

否。ネガティブを絵に書いたような人物たる亜紀雄に、人柄で褒められた経験は皆無である。

……やはり、僕には何もない。スズランにも東さんにも小林君にもちゃんとあるのに、僕には何もない。僕がここにいる理由がない。ここにいる意義がない。

ここにいるのは僕でなくてもいい。

ギリシ、と亜紀雄は唇を噛んだ。

深く重い虚無感、無力感、脱力感。自分を肯定できない逡巡。このまま頭を目の前の机に打ち付けて、今すぐ意識を飛ばしてしまいたくなる衝動に駆られたところで

「もう、鞆河君、ちゃんと聞いてますか？」

舌足らずな声が聞こえてきて、亜紀雄は思考を中断した。声がした方に目を向けると、亜紀雄の隣の席、そこにちょこんと座っている背の小さい女子生徒が視界に入った。亜紀雄と同じ委員会に属する一年生、花塚まいみである。まいみはポニーtailを揺らしながら、呆れたような諦めたような顔で、

「仕事の割り振りくらい、きちんと聞いてください」

「……あ、『じめん』

亜紀雄は謝りながら、机の上のプリントに視線を戻す。

『年度、体育委員会仕事分担表』

プリントの上段にそう書かれている。そしてその下には表が乗つていて、学年、クラス、名前、担当月がマスを埋めていた。

現在は放課後、委員会の時間なのである。

亜紀雄の通うこの高校では、毎月第一木曜に委員会で集まり、そ

れぞれの職務を遂行することになつていて。美化委員や園芸委員など全部で十二個の委員会が存在していて、全校生徒がそのいずれかの委員会に属しているのである。

そして、亜紀雄が在籍しているのが体育委員。

体育委員の仕事とというのは、簡単に言えば体育関連の設備の管理。体育館や体育倉庫、グラウンド、プールなどの設備や、その他ボールや跳び箱などの道具を管理するのである。体育と十派一絡げに言つても、担当する場所、物品はなかなか多い。効率的に仕事をこなすためには、クラスごとに担当場所を決める必要がある。

なので仕事の前に、委員会のメンバー全員で空き教室に集まり、仕事の分担をしていたのである。

まいみは、ようやく田の焦点をプリンントに合わせた亜紀雄に、「別に難しい」と言つてゐる訳じやないんですから、委員長の話ぐらいちやんと聞かないダメですよ

「そうだね……ごめん」

「……まったく、返事にも霸氣がないですね。そんな暗そうな顔して変に思い悩まないで下さいよ。そんなんだから『歩くマイナス極』なんて呼ばれるんです」

「な、なぜ僕の中學の頃のあだ名をツ？」

「顔を見れば分かりますよ」

ふいつと顔を背け、さも当然そうな声音で囁つまごみ。

亜紀雄は顔を伏せた。

『歩くマイナス極』

この言葉が、やけに胸に響く。一、二年前、さんざん揶揄された言葉。呼ばれた名前。こんなネガティブなイメージしかないあだ名は、もちろん亜紀雄自身だつて気に入つていない。しかしそれ以上に嫌なのが、自分をしてこのニックネームが妥当だと思えてしまうことだった。

マイナスでしかない存在。ネガティブでしかない存在。負け続ける存在。それが自分。

ああ、何で僕は と亜紀雄が机に肘を突いたとき、

「申し訳ありません。遅れました」

という声と共に、ドアが開けられた。亜紀雄が顔を上げると、扉の横に立っているのは小麦色の散切り頭の女子生徒スズランであった。申し訳なさそうな顔で立ち尽くしている。

スズランが必須の会議に遅れてきたということで、彼女を知る委員会の他のメンバーは意外そうな視線をスズランに向かた。職務をきつちりこなすスズランにしては、ありえないほどの凡ミスである。しかし、スズランが遅ってきた理由を知っている亜紀雄は、当然のごとく驚いていない。むしろ案外早く済んだなと思つたくらいである。

スズランが遅れた理由 それはつまり、恋文のお返事。

スズランが他の誰かと付き合つているのを知りつつも諦められない男が、懲りずに手紙を渡してきたのだ。そして誰にも邪魔されない時間として、委員会の時間を指定してきたのである。

委員会が始まる直前、別れ際にスズランは、

「では、行つてきますね」

と、初めてのお使いを任せられた子供のように鼻息を荒くして、手紙に書かれていた場所（校舎の屋上）に向かつていったのだった。何でそんなことを宣誓してくるのか亜紀雄にはいまいち理解できなかつたが、それがスズランの性格なんだらうと思い直した。

ともかくにもスズランは、そういう理由で委員会に遅れたのである。

スズランが常日頃品行方正な生徒であることを知つてゐる体育委員の担当教官は、

「わかつたから、ほれ、早く席に着け」

と、特に怒ることもせず、中に招き入れた。スズランは再度「すいません」と言つて、そそくさと亜紀雄の隣に座る。

スズランが椅子に腰掛け、プリントを取り出したのを見て取つた

亜紀雄は、まいみにも聞こえないくらいのヒンヒソ声で

「……雪代君に会つてきタ?」

「はー。面と向かつて告白われました」

「……そつ。……で、ちやんと言つてきタ?」

「ええ、もちろん」

スズランは得意げな顔で、

「ちやんと、了承してまつりました」

「……………へ?」

亜紀雄は裏返つた声を上げた。

「……了承? って、つまり永田先輩とは別れて、雪代君と付き合つてマト?」

「いいえ」

「……じゃあ、一股?」

「違いますよ」

スズランは明快な否定。亜紀雄は余計に意味が分からなくなりながら、

「え? でも、永田先輩とも、雪代君とも付き合つて」とだよネ?
? それは一 股つてことじやないノ?」

亜紀雄の疑問に、スズランは「うふふふふふ」とやたらおかしそうな表情で、

「確かに雪代さんとも永田さんとも交際を続けますが、私はそれ以外にも紀野さん、安田さん、岩坂さん、小野さん、常盤さん、倉井さん、早野さん、上月さん、上村さん、五十嵐さん、夏田さんとも交際をしておりますから、一股ではあります。十三股です」

亜紀雄はあんぐりと口を開ける。

「……え? みんな遊びつてこと?」

「そんなことはありません。みなさん本気です」

スズランはいたつて真面目な顔で首を横に振り

「みんなを本気で我々の手駒に代える予定です」

亞紀雄は口をさらに大きく開けた。

「私も日々女を磨いてはおりますが、すべては亞紀雄様のため。亞紀雄様の武器の一つとするために他なりませぬ。周囲を籠絡し、丸め込み、抱き込み、そしてかかる後に利用するために、私は私に出来る最大限のことをしているに過ぎませぬ。他の殿方を操り、情報を取り出し、時に捨て駒として使う。そのための私の外見なのです。最初に陸上部に在籍する永田さんを取り込んだのも、彼が兵としてなかなか使えそうな駒だったからです。戦の折には、どうぞ率先して使ってやってくださいまし。そのために私は昼休みの貴重な時間を彼と過ごしているのですから。うふふ。今はまだ何もありませんが、亞紀雄様のためになるならば、いくらでも体を張らせていただきます。もちろん、もし亞紀雄様が欲するならば、私は喜んで直接あなた様のお世話を」

亞細亞は首を小亥みに扱り

「そんな、駒の心内などいちいち考へてゐる暇などありません。國
……そんなどして、みなさんかたれいそんじや」

のためなりに似たる手のかり似ていがれに

ンがその人たちに恨まれちゃうし

「心配ございません。駒共には亞紀雄様のあの字も出しておりますんゆえ、亞紀雄様に害が及ぶことはありません。確かに私にはいくらかの危険はありますが、私は精霊ですので、滅多なことがない限り消えてなくなることはありません。亞紀雄様の最後を看取るまで、お側に仕えさせていただく所存にあります」

「み、看取るつて、一体何年後まで

「コホンッ」

背後から咳払いが聞こえ、亜紀雄は振り返った。

そこには口元に拳を当てるまいみ。みけんにしわを寄せ、「そういうのは別のとき、別のところでやってください。今は委員会の時間です。ほら、早く持ち場に行つてくださいー。」

しつしと手を振る。見ると、他の生徒も席を立つといひだつた。いつの間にか会議が終わつていたらしい。

亜紀雄は得心がいかないままスズランを引っ張り、すいすいと教室を出て行つた。

第三話「委員会」　その一

亜紀雄とスズランの担当場所は、第一体育倉庫だった。

この部屋は体育館の建物の隅の方にひつそりとあるもので、外からしか入れない造りになっている。コンクリートで固められた立方体に明かり取りの窓がついているだけの、こぢつぱりとした閑静な場所。跳び箱を四つくらい並べればそれだけで足の踏み場がなくなってしまうような、至極狭い倉庫なのである。

この部屋の使用方法はとくに、準ゴミ置き場のようなもの。

表面がボロボロで使いようがなくなつたバスケットボールや、十数年前から置き放してある剣道の防具など、近々捨てる予定のものをとりあえず押し込んでおく場所である。そんなことのためにしか使われないので、ここに出入りする人間は限られている。ゴミを放り投げに来た体育教師や、今回の亜紀雄やスズランのような委員会の特命で掃除を仰せつかつた生徒くらいのものだ。他には滅多に人の出入りがないため、床にはホコリが溜まり、部屋の隅にはクモの巣がかかっている。

そして今回、中に詰まつっていたゴミ予備軍は先月にすでに全部出していたので、倉庫の中は空っぽ。ドアと窓とゴミ箱と天井の電球以外何もない空間が出来上がつていた。

というわけで、今月の亜紀雄とスズランの掃除対象はただ一つであり

「だからさあ、スズラン」

亜紀雄は倉庫の床をホウキで掃きながら、彼の傍らにしゃがみこんでチリトリを構えているスズランに話しかけた。

「僕は別に、この国を征服するつもりなんて全然ないんだ。だから手駒なんて集める必要もないし、そのために君があれこれ動く理由は何もないんだよ。その十三人に対して好意があるわけじゃないんならさ、お互ののためにちゃんとお断りした方がいいと思うんだ」

腕をせつせと動かしながら、諭すように訴える亜紀雄。

それを黙つて聞いていたスズランは、チリトリを握ったまま立ち上がり、それをゴミ箱の上でひっくり返しながら、

「……なるほど。つまり亜紀雄様は、自身の戦はできるだけ避け、頭脳戦で国を我が物にする主義なのですね」

納得顔でうんうん頷く。

「だからできるだけ柔軟に他人と接しろ、と。そういうことですね、なるほど……。そのようなアウトローな戦法は、私としては狡くていただけない部分もあるのですが、亜紀雄様が言うのでしたら仕方ありません。私もその命に従いましょう」「

「……もう何でもいいから、とにかく十三股はどうにかしてクレ亜紀雄は疲れたように肩を落としながら呟く。

スズランはチリトリを握り直しながら、

「では、その辺りのことは明日以降、おいおいやっていくことにいたします。……とりあえず掃除も終わりましたし、今日は帰りましょーか。私も早く夕飯の支度をしなければなりませんし」

「……そうだネ」

亜紀雄は五十キロを完走し終えたランナーのような声で答えた。そして片手にホウキを握り締めたまま、この倉庫唯一のドアのノブを回し、押し開こうとしたところで

ガタンッ

「…………え？」

思わず反発力に、首を傾げる亜紀雄。そしてもう一度ノブを回し、ガタンッ

ガタンッ、ガタンッ、ガタンッ、ガタンッ、ガタンッ

「…………あれ？」

「どうしました、亜紀雄様？」

「いや、それが……」

亜紀雄は額に縦線を入れた顔で、スズランの方を振り返りながら

「 ドア、開かないんだけど……？」

* * *

亜紀雄が腕時計を見ると、時針は八時過ぎを示している。

今日学校に来てから十一時間、放課になつてから四時間、第一体育倉庫の掃除を始めてから三時間 そして倉庫に閉じ込められてから一時間が経つことになる。

あれから、一人でドアに体当たりを食らわしてみたがびくともせず、外に届くように叫んでみたが誰かが助けに来る気配もない。出入り口はこの扉一つだけだし、窓もはめ込み式で開閉しないので、完全に閉じ込められたことになる。八方塞である。

何でこんなことになつたのか？

亜紀雄が先ほど上の空で聞いていた体育委員長の話を思い出してみたところ、そう言えば第一体育倉庫の用具を入れ替えると言つていた。第一倉庫にはバレー・ボールのボールやマット、跳び箱など、重量のあるものが置かれていたはず。そして入れ替えと言つからには、それらを倉庫から追い出すことになるだろう。

その用具群によつて、この第一倉庫の入口は塞がれたのかもしけない。

ドアノブはちゃんと回るので、鍵が壊れたというわけではない。押し開こうとすると扉が何かに当たり、動かないのである。明らかにドアの向こうにある何かが邪魔をしている。二人がかりで押しても動かない何か。……やはり、体育用具の類だろう。

その用具を戻してくれれば出られるんだが……。

しかし、それは望み薄なことだつた。時間はもう八時を過ぎている。下校時刻はとつゝの昔だ。十中八九、生徒も先生も帰つてしまつただろ？。

そう言えば、この第一倉庫の入口には軒下スペースがあった。その内側に置いておけば、たとえ雨が降つても用具が濡れる心配はないだろう。それを考慮してそこに放置したとも考えられなくもない。しかしだからつて、入口付近に置き放しておくのは不注意すぎる。誰の指示で動いていたのかは亞紀雄の知るところではないが、その人は中に誰かがいることまで頭が回らなかつたのだろうか。

「……まったく、どうしたものか」

亞紀雄は顔をうつむけながら呟いた。壁によりかかつて、体育座りをしている体勢。扉を叩いたり叫んだりするのも疲れ、一時間前からずっとこの姿勢なのであつた。

きゅるる

亞紀雄の腹が鳴つた。無理もない。夜の八時といえば、いつもなら夕飯など食べ終えている時間である。さらに言えば、今日は夕飯前のつまみ食いも叶つていない。昼食以来七時間、亞紀雄は何も食べていないのである。

「申し訳ありません、亞紀雄様。私がもっと注意していれば……」

亞紀雄の隣で同じく体育座りをしているスズランが、申し訳なさそうな声で言つてきた。

「亞紀雄様にひもじい思いをさせるなど、このスズラン、一生の不覚です。……せめて私が、こんな樹脂製の人形ではなくアンパンかメロンパンあたりに憑いていれば、亞紀雄様に頭の一部を差し上げることもできたでしょうに……」

「……まあ、一体どこからその二つがインスペイアされたのかは教えて聞かないけどさ」

亞紀雄は頬に冷や汗を垂らし、

「……ただ、実際にそんなことすると、腐らないように数日に一回パンを焼かなきゃいけなくなるから、たとえ出来たとしてもやらな

いでクレ

あ、」を引きつりせた表情でそう答える。やつ答えたといふで、

さあ るる

再度、亜紀雄の腹が鳴った。腹時計のなんと正確なことだらう。現在亜紀雄の胃袋では、クーデターでも引き起こしそうな勢いで腹の虫のデモ行進が行われている。

亜紀雄は空腹感に苛まれつつ、打ちひしがれたように天井を見上げて、

「……しかし、こままだと明日の朝までずつとこのままダ。それまで水も飲めないなんて、餓死してしまフ……。ああ、せめてあの窓を蹴破つて出れたら……」

そう言いながら、ドアの隣上方にある、一メートル四方くらいの窓ガラスを恨めしそうに見つめた。

スズランは、亜紀雄のその視線を目で追い、

「…………あの窓、壊してよろしいのですか？」

「ん？…………ああ。本当はいけないんだろうけど、できるならそうしタイ。このはじょうがないダロ。後で怒られるかもしれないけど、数時間も空腹に耐えるのよりはマシだヨ」

「そうですか……」

そう呟くと、スズランはすくと立ち上がった。そしておもむろに、窓の方へと近づいていく。

「…………ちょっと、どうする気？」

「決まつてますわ」

そう答えながら右拳を握り、肩の上に持ち上げるスズラン。

「ちょ、ちょっと待つた！ その窓、結構硬くて」

しかしそんな亜紀雄の声を無視して、スズランは上半身を回し、腕を突き出しながら、その窓ガラスにストレートのパンチを繰り出した。

「ゴンッ

しかし、聞こえてきたのはガラスの割れる音ではなく、もっと鈍

い音。

その衝撃音から一秒置いて、何か小さいものが亜紀雄の目の前に飛んできた。顔を近づけてよく見ると、それは白くて、人の手の形をしたもの。マネキンの手のよつなものだつた。

「……うーん、傷はつきましたが、割れませんね」

そう言いながらくるつと振り返るスズラン。見ると右手がなかつた。手首の部分が砕けている。

「……！ ちょ、大丈夫ッ？」

慌ててスズランに駆け寄る亜紀雄。

しかしスズランの方はすました表情で、

「ええ、この体はただの器ですから、なんてことはありません。後で接着剤でくっつけておけばよいでしょう。……うーむ、しかし困りましたね。ここまで硬いとは。何か工夫をしなければ……。体当たりしようにも、あの高さでは届きませんし、周りに硬くて重いものもありませんしね。うーむむ、一体どうすれば……」

亜紀雄の心配などよそに、窓を覗んで考え込むスズラン。

確かに、スズランの体は元々はプラスチックのマネキンであり、物理的損傷はスズランには何のダメージも与えないことは亜紀雄も知っていた。人形を修理するように接着剤でくっつけておけば元通りになることも。

しかし、人間以外の何者にも見えないような少女が右手首を完全に失っている姿は、平和な世間しか知らない亜紀雄の気をもませるには十分なものだつた。スズランは痛がる素振りも見せないし、血も出ない。しかしその碎かれた手首は、亜紀雄にとつて見ていて十分痛々しいものだつた。

と、そんな亜紀雄の不安そうな表情に構うことなく、スズランは

「……そうですわね、あの手でいつてみましょ」

ぱっと何かを思いついた顔になつた。そして窓がある方向とは別 の、まつ平らな壁に視線を移す。

(……今度は何をする気なんだ？)

亜紀雄がまた不安そうにスズランの行動を眺めていると、スズランは壁に相対して半身の姿勢になつた。今にも駆け出しそうな体勢。

「……まさか」

と呟いた亜紀雄の予想通り、スズランはそのまま壁に向かつて駆け出して、壁に体当たりを食らわせた。

「ゴンッ

さつきと同じ もしくは少し大きく太い 音がする。そして、また何かがトスンと床に落ちた。

それはさつきよりも大きなパート

スズランの右腕だった。

「……これならいけるでしょうか？」

そんなことを呟きながら、スズランは制服の上着を「レモレ」そと脱ぎだす。そして残る左手で落ちた右腕を拾い上げ、脱いだ上着でくるんだ。

「……ちょっと、スズラン。何する気？」

「ふふ。まあ、見ていてください」

そう言つと、スズランはくるまつた上着をまるで投げ縄のように頭上でくるくる回し、そしてそれを窓に向かつて振り下ろした。

「がしゃあん

今度こそ、甲高い破壊音。ガラスの破片が飛び散った。

「ほら、割れましたわ。どうです、亜紀雄様。私の手際は？」

「……いや、まあ……」

得意げに胸を張るスズランに、亜紀雄は呆けたように答える。

「さ、亜紀雄様。ここから出ましょ。…………おつと、この割れ残りは危ないです。払つておきましょ！」

そう言つて、スズランは自身の左腕でもつて窓枠に沿つて残つているガラス片を払つた。当然のように手に傷がつき、服に切れ目が出来る。しかしスズランはそんなことを気にすることもなく、せつせと腕を破片にぶつける。

そして窓枠からガラス片が見えなくなつたといつて、

「さ、どうぞ。亜紀雄様」

「……う、うん」

促されるままスズランに手を引かれるまま、亜紀雄は倉庫から抜け出した。

窓から這い出すと、外は星空、満月だつた。

ようやく出れた、といつ安堵感も亜紀雄の中には確かにあつたが、それよりも亜紀雄には、スズランの現在の姿の方が気になつている。

亜紀雄の目の前、月明かりに照らされている、右腕が壊れ、左腕が傷だらけで、汚れた上着を肩に掛け、切れ目があちこちにあるワイヤシャツをまとつた少女は、それでも晴れやかな笑顔を亜紀雄に向けたままで、

「さあ、早く帰りましょう

「…………」

「」で自分が言つべき言葉は、やはり「ありがとう」なのだろう。恩を受けたことに対する返答は、言つまでもなくそれが最適である。しかし亜紀雄は、スズランにはもつと言つておくべきことがあるようと思えた……思えたが、それはどんな言葉なのかまでは、亜紀雄には分からなかつた。

分からず、思いつかず、結局亜紀雄は

押し黙つたままで、スズランの後ろを歩き出した。

第四話「転校生」　その一

「今日は、転校生を紹介する」
スズランが来て二ヶ月が経つた、三月第一月曜日の亜紀雄の朝は、担任のそんなセリフから始まった。

一瞬でざわめきに包まれる教室。

そんな事前情報は、生徒の誰一人聞いていなかつた。一年四組三十九人の生徒全員（本日の病欠一名除く）にとつてみな等しく、寝耳に水な展開。みんながみんな意外そうな表情を浮かべ、近所同士で「知つてた？」、「いや、知らなかつた」などの確認をし合つている。

しかし担任教師はそんな反応を気にすることなく、ドアの方を向いて、

「おーい、では、入つてきてくれ」
そう呼びかけた。

すると、がらがらと扉が横に開いて、そこから現れる生徒。教室に足を踏み入れ、教卓の方へゅつくりと歩を進めてくる。生徒達が静かに見守る中、その転校生はすたすたと歩き続け、そして担任の隣にたどり着くとぐるっと左向け左をし、つまりは生徒達に向かつて真正面を向いた。

ようやくその容姿をクラス全員の前に現した、ブロンドのロングヘアに釣り上がった目つき、スレンダーな体躯をした女子生徒は、その顔にスマイルを浮かべ、蚊の鳴くような声で、

「初めまシテ。イギリスから来た、東リーネと言ひマス。よろしくお願ひシマス」

そう言い、ぺこりと斜め四十五度のお辞儀をする。

その貴族のような丁寧な物腰と容姿に、男子も女子ものべつまくなくその姿を呆けたように眺めた。そしてほどなくしてどこからか拍手が始まり、やがてそれは三十九人全員に伝播した。挙句は、調

子に乗った数名の男子が口笛まで鳴らし、野球の応援のよつよ「ようこそー」と叫んだりもしたのだった。

しかしそんな喝采にも、その転校生、東リーネはにこやかに微笑んで、

「ありがとう、ジゼラマス」

と、気後れする様子もなく応対する。

担任教師は喝采をまあまあとなだめると、

「じゃあ、君の席は窓際一番後ろの空いているところだ。そこに座ってくれ。あと、それから、そうだな」

担任はぐるりと教室を見回した後、教室の中ほどでポカンとしていた亜紀雄を指差し、

「じゃあ、鞘河。最初はお前が彼女の面倒を見てやれ」

「ええ！ 僕ですカツ？ なぜですカツ！」

「ああ、お前英語できるだろ？」

「…………」

納得の理由に、反論できなくなる亜紀雄。そう言われたら、しようがない。気が乗らないとか、面倒だとか、初対面の人を相手にするのは気が引けるなどという理由が通じないのは、亜紀雄にも自明のことだった。

まあ、その世話役もせつぜつ一週間くらいやればいいくらいのものだろう。

やう思て「やれやれ」と呟きながら、亜紀雄はため息を一つついた。

転校生東リーネの容姿が男の大多数を惹きつけるに足るものであることは、亜紀雄も認めるところであった。小顔に白い肌、すっとしたスタイル。一言で言えば「モデルのような」という形容表現がしっくりくるものである。

そんな女性が身近にいるのならばお近づきにならない手はない

考えるような短絡的かつポジティブな思考を持つ男子生徒は、二十一人もいれば一人や二人含まれるものもある意味当然の流れで、こと亞紀雄のクラスにはそんな輩が七、八人いた。

彼らは休み時間ごとにリーネに話しかけ、また話しかけるための話題を創作するのに四苦八苦し（しかし結局のところ、彼らの

「イギリスのどこから来たの？」

「日本語どこで勉強したの？」

「うちのクラスにも東さんつているんだけど、親戚？」

というようなありがちな質問集は

「バーミンガムデス」

「ママが日本人なんデス。家ではたまに日本語を使うんデス」

「そ、うなんデスか？ 知りませんデシタ。聞いてないデスねー」

という、さらに当たり前の返答のみで終わってしまうので実は結ばなかつたのだが）、そんな勞もせずに、授業システムや食堂システムの説明ということでリーネに話しかける機会を得ている亞紀雄に対して、羨ましさと疎ましさを三対七程度含んだ視線を浴びせている。亞紀雄も亞紀雄で、背中に針が刺さるような感覚を覚えるようになり、そんな傾向にも薄々気付いてはいた。

しかし実際のところ、亞紀雄にとってこのタイミングで仕事が増えるのは、まったくもって望まないことだった。

それは説明するまでもなく、亞紀雄は現状でも十分参つていたからである。

まず一つとして、先週の委員会で割つてしまつたガラスへの弁償として、亞紀雄は毎日のトイレ掃除を命じられていた。

この刑を言い渡した学年主任の弁によると、確かに体育用具を出入り口に置き放したのも悪いには悪いが、しかし公共のものである窓ガラスを割つたことも悪いことは悪い。あの窓ガラスは市民が働いて収めた税金から賄われているもので、その大切さを認識せねばならん。というか、もう少し周囲に注意を払つて生活するように。一応便宜でトイレ掃除一週間で許してやるが、今度やつたらきつち

り弁償してもらつ、とのこと。

正直なところ亜紀雄はこの説明にまったく納得できていなかつたが、変に食い下がつて逆に「反省しとらんのか」と刑を重くされてしまはないので、しぶしぶ従うこととしたのである。

もちろん、スズランが腕を壊して上着でくるんで云々という事情を先生に説明できるわけもなく、あの窓も亜紀雄が力ずくで割ったということにしてある。そういうわけで、亜紀雄は毎日放課後一人、トイレ掃除をすることになったのである。

申し訳なさそうな顔をしたスズランが

「手伝います」

と言い出しきたが、逆に手伝われて先生に見つかることもなんなら逆効果にしかならない気がしたので、詮無く亜紀雄はその提案を固辞したのだった。完全な不幸スパイナルである。

また、亜紀雄の苦心はそれだけではなかつた。

体育倉庫脱出劇の次の日、スズランは早速彼女の 駒 十三人に別れを突きつけていったのである。

どのようにやつたのかは亜紀雄の知るところではないが、スズランもうまくその男子達を言いくるめたらしく、亜紀雄も逆恨みで襲われるようなことはなかつた。椅子の上に画鋲を置かれたり、ロッカーに「ミミを詰め込まれたり、上履きを隠されたりと、その辺りのとばつちりは覚悟していたが、すべて取り越し苦労だつた。被害者と廊下ですれ違つても睨まれることすらなかつたのである。逆に亜紀雄が「一体何をどうすれば十三人との円満別離が可能なのか?」と悩むほど平和だつた。

しかし、問題はその周囲。噂話の方だったのである。

スズランが陸上部の先輩などと別れたということはあつといふ間に周囲に広がり、それが色々な憶測を呼んでしまつたのだった。それらの噂が収束した先は、つまり

「亜紀雄とスズランが喧嘩して、やけになつて他の男に走つたが、結局仲直りして元の鞄に戻つた」

といふこと。もはや、亜紀雄とスズランが恋人であることはすでに大前提になつていた。

おかげで廊下を歩くと度々変な視線を背中に感じたし、どこからともなく「……まったく、迷惑つたりやありやしない」という（恐らく十三人のうちの誰かが想い人だつたのだろう）女子生徒の陰口が聞こえてきたし、近しい友人の冷やかしも散々受けた。

かようにして、亜紀雄はこの一週間、肉体的、精神的双方からの攻撃に抗い続けていたのである。

もうこれ以上、変な問題は起こらないで欲しい。

亜紀雄は切実にそう願つていたのだが、

その願いは、叶うべくもなかつた。

発端は、リーネが転校してきてから約一週間が経つた頃の昼食。その日、スズランは亜紀雄の元に来てから一度目の失敗をやらかしてしまった。つまり、前日の夕飯を焦がしてしまい、その日の昼食の弁当が用意できなかつたのである。

加えて、その日の朝はあまり時間がなかつたため、通学途中に昼食用の弁当を買うことができなかつた。なので、その日の昼食は購買で済ませることになつたのだった。

昼休み、

「本当に申し訳ありません」

と、前日から数えて百回近くになる謝罪を述べているスズランを連れ立つて、亜紀雄が

「いや、別にもういいから。早く購買に行コウ。売り切れちゃうヨ」

と、まったく怒つていないと表すような笑みをスズランに向けながら、立ち上がつた

その時だつた。

「エヘヘ」

と、リーネが亜紀雄の方に近づいてきた。悪戯っぽく笑い、手を後ろで組んでいる。まるでこれから驚かせようとしている子供のよ

うな仕草だった。

「え? 何、リーネさん?」

「お世話になつておるお礼デス」

そう言いながらリーネが差し出してきたのは、ナップキンにくるまれた直方体。一目でそれが弁当箱であることが分かるものだった。

「こんなことあるうかと、作ってきたんデス」

「こ、こんなことって、一体、あなたどんな

「ズズランさんの分もありマスよ」

身を乗り出してきたズズランに、リーネは背中からもう一つの弁当箱を取り出した。

「さ、お二人とも食べてください」

そう言いながら、リーネは二人のリアクションに構うことなく二つの弁当を机の上に置いて、いそいそとナップキンをほどく。そして弁当箱のふたを開け、亜紀雄にズイッと差し出してきた。

亜紀雄は突然のことに呆けながらも、しかし好意ならば受け取つても悪いことじやない、というかむしろ拒むのは逆に悪いんじやないかと思いながら、

「え? いや、まあ、そう言つなら……」

と、半ば押し切られるようにリーネから弁当を受け取つた。

その中身は、白飯、煮物、焼き魚と、イギリス帰りの人間が作ったとは思えない日本料理。亜紀雄は手渡された箸でつまんで一つずつ口に運んでいくが、どの料理も作成後数時間たつたとは思えないほど味を楽しめるものだった。

一人が食べる様を、横で嬉しそうに眺めていたリーネが、

「どうデス? エヘヘ、練習したんデスよ? おいしいデスか?」

「え? ああ、おいしいヨ」

「どれくらいおいしいですか?」

「どれくらい……いや、ものすごくおいしいヨ」

「ものすごくってどれくらいですか?」

「どれくらいって、それは…………驚くほどおにしこ山」

「ホントデスか！ よかつター」

と無邪気に笑うリーネ。

その喜びように、亜紀雄が少々引きつった顔で笑顔を返している

と、

「…………ですか。私の弁当は全然驚くほどではないのですか……」

背後から、おどろおどろしい声。

亜紀雄がぎくっとしつつ首を回して後ろを振り返ると、皿を逆三角にしたズズランの顔。どんよりとした空氣をまとい、肩の上には紫色の火の玉が浮かんでいる。

ズズランは刺すような視線を亜紀雄に向ける。

「…………そんなにお口に合ひのしたら、毎日リーネさんに作つていいただいたらいかがです？」

「へ？ いや、もういうわけじゃなくて、ズズランの料理だつて十分おいし」

「十分つて何ですか！ 最低限のレベルだといつ」とですか！」

「い、いや、ものすごくおいしいと思つて」

「嘘です！ だって、今までの一ヶ月間、私は毎日毎日亜紀雄様のお食事を作つてきましたが、一度だって『おいしい』なんて言つてくださいたことなかつたじゃないですか！」

「いや、言わないだけで、おいしいとは」

「それは、言うほどではないといつことですか？」

「いや、だから」

この日、亜紀雄は昼食を食べる暇もなく、昼休みいっぱいを使つてズズランをなだめることになつたのだった。

あるいは、金曜日の放課後。

教室のあちこちで帰り支度を済ませた生徒達がこれからあるいは週末の予定を話し合つてゐる中で、リーネが亜紀雄に話しかけてき

た。

「アキオ。明日、映画見に行きませんか？ パパにチケットもらつたんデス」

「映画？ ……ええと、明日は一応暇だけど……」

「ホントデスか、じゃあ一緒に」

「私も同行します！」

亜紀雄の横でその話を聞いていたスズランが、割り込むように言つてきた。

「私の役目は亜紀雄様の身辺警護ですから、私も当然着いていかなければ」

「でも、チケット一枚しかないんデス。しかもこれ人気で、予約で満席みたいなんデスけど……」

「では、諦めてもらうしかありませんね」

両手を腰に当て胸をそらして、スズランはきつぱりと言つ。その顔にはさも勝ち誇ったような表情が浮かんでいる。

リーネは一枚のチケットひらひらと振りながら、

「いいんデスか？ これ、アキオが大好きなやつデスよ？ これ迷すと、もうチャンスはナイかも」

「ああっ、ほんとダ！『新宿イーストレイク』！ これ見たかつたんだ」

そのチケットを見て、思わず叫ぶ亜紀雄。

その亜紀雄の食いつきようを見て、スズランは驚いたように、「な、なぜ転校してきて一週間も経っていないあなたが、亜紀雄様の嗜好を知っているのです！」

「人付き合いは長さよりも密度デスよ」

チッチッチと人差し指を振りながら、リーネは答えた。

「英語で話せるおかげで、アキオとは日本語のときよりもナチュラルな話ができるのデス。エツヘヘ。もう今では、あなたよりもアキオについて詳しいかも知れまセンね」

「な、何をでたらめなことを！」

「なら、あなたはアキオの好みを言えマスか？ アキオの好きな映画は？ 好きな作家は？ 好きな漫画は？ 好きなミュージシャンは？ 好きな女優は？ どうデス、スズランさん？ 言えるんデスか？」

「……うぬー」

歯を食いしばるスズラン。

従者という立場が立場であるため、スズランは田代の亞紀雄の生活に無理矢理干渉することはない。あくまで世話をするだけである。なので亞紀雄の個人的な嗜好に関しては、知らない、というより知らないようにしてきたのである。

何も言えなくなっているスズランに、今度はリーネが勝ち誇ったような表情をぶつけて、

「ちなみにワタシは言えマスよ？ アキオが好きな映画はピーポン。好きな作家は京極。好きな漫画はホーリーランド。好きな音楽は -f10。好きなポテチの味は薄塩。好きな女優は仲間です。ウフフ。どうデス、スズランさん？ あなたはここまでアキオのことを理解していまスか？」

リーネの「降参デスか？」というような表情に、業を煮やしたスズランは、

「な、何を言いますか！ 私は毎日亞紀雄様の身の回りのお世話をしているのですよ！ 亞紀雄様の家の掃除も炊事も洗濯も、全部私がやつしているのです！ そうですよ！ 亞紀雄様の身辺のことなら何でも存じております！ た、例えば…………そう！ 亞紀雄様の今日の服装！ ワイシャツの下に、白地で胸の辺りにリンクの柄がついたTシャツをお召しになつてあります。あと、今日は寒いのでズボンの下に体育のハーフパンツを穿いていて、今日のトランクスの柄は青と紫のチック地で、『ムのところ』『アキオ』という刺繡が

「言つナーッ！」

「亞紀雄様の嗜好だつてちゃんと存じております。好きな女性のタ

イプの平均サイズはB 87・7、W 5

「な、何を元にそのデータを算出したんだッ！」

この日、亜紀雄はなぜか周囲の男子から暖かい視線を浴びることになった。

つまりはこのようなことが毎日のように繰り返されるようになり、こんな毎日を一週間も繰り返せば、当然のことく亜紀雄も疲れてくる。自分はネロとパトラッシュの次に哀れみの視線を多く受けた人間ではないかとすら思えるほどだった。

そんな毎日を送っていたため、東リーネが転校してきてから一週間が経つたその日の放課後、掃除場所に行く直前にスズランが、「すいません、ちょっとどうしても外せない用事があるので、亜紀雄様は先に帰つていてください」

と言つてきたとき、亜紀雄は心の中で安堵した。

亜紀雄が疲れる理由というのは、いわばスズランとリーネ両方を相手にすることで発生するもので、片方だけでも亜紀雄の周囲から離れていればその心配はない。だから、少なくとも掃除の間は安心できる。亜紀雄はスズランの用事が一体何なのかという疑問を疑問と思つこともなく、そう思つた。

そしてつつがなく掃除が终わり。

亜紀雄が教室に戻ると、残っている生徒はほとんどいや、一人しかいなかつた。西日が差し込む教室。その中ほどで誰かを待つように一人立っていた生徒。それは黄金色の髪を腰元まで伸ばした女子生徒

東リーネだつた。

リーネは教室に入つてきた亜紀雄に気付くと、振り返りながら「あ、アキオ。『苦労デス』と笑いかけてくる。

スズランが側にいるときはその笑顔にも戦々恐々としてしまうが、今日は特例。その笑顔もクラスメイトのそれでしかない。

亜紀雄も何ともなしに、

「おっす。」

と答えた。そして自分の席に着いて机の中を覗きこみ、帰り支度を始める。

リーネは最初その様子を笑みを向けて眺めていたが、すたすたと亜紀雄の後ろに近づいていった。そして机の中から教科書ノート類を取り出している亜紀雄の肩の上に顔を出し、口を耳元に触れるギリギリまで近づけてきて、吐息のような声で

「 アキオ。悪いデスけど、スズランさんのことは、忘れてクダサイ」

「……………え？」

亜紀雄は思わず横を向いた。

それに合わせて、リーネは後ろへ一つステップを踏む。そして背中で手を組み、その顔に満面の笑みを浮かべて、

「ウフフ。いきなりで、別れの言葉を言う暇も『えないのは悪い』は思いマスが、これもあなたのことと思つてのことなんデス。危険因子はすべて排除しなければなりません。それがワタシの仕事。東家の仕事。分かつてクダサイ」

「え……？ いや、君が何を言つてるのか、意味がさっぱり分からんんだけど……」

亜紀雄は、その展開とリーネのセリフの意味がまったくわからないうことを顔全体で表しながら答える。

「ええと、つまりデスね、簡単に言つと

リーネは依然微笑んだまま、そのブロンドの長髪を後ろに流して、

「 あの精靈は、あなたのところには、もつ帰つてこない」

第四話「転校生」　その一

亜紀雄は、鍵穴に鍵を差し込んだ。

時計回りに回すと、ガチャリと言つて鍵が回る。ドアを押し開くと、そこは真っ暗な玄関だった。

見慣れた、我が家家の玄関。

中学一年までずっと住んでいた家であるし、アメリカから帰ってきてからのこの一年間も、毎朝毎夕通っている場所だ。何百回、何千回、何万回と田にした内装。田新しいものなんて何一つない。しかしそれでも、違和感が拭えない。

そう　　今日は静かだ。

この二ヶ月、この場所を通る時は、いつも隣にスズランがいた。朝は「さあ、学校に参りましよう」と言つて、夕方は「では、私は夕飯の支度をいたしますね」と言つて、亜紀雄と並んで微笑んでいた。当然のようにそこにいた。

しかし今日は、二ヶ月ぶりに彼女がない。彼女がここに存在しない。

もしかしたら先に帰っているのかも　　という一縷の望みは、完全に裏切られた。玄関も、廊下も、その奥の居間も完全に真っ暗だ。真っ暗で静かだ。一日でそこに誰もいないことが分かるくらいの暗闇と静寂だった。

あれから亜紀雄は、一時間校舎中を探し回り　　一時間学校中を探し回り　　一時間学校の近所を探し回り　　一時間通学路を探し回った。

しかし、スズランはどこにもいなかつた。

しかも探し回つてこらへり、リーネのことまで見失つてしまつたのだった。

最初教室で問い合わせてみたが、リーネは思わずぶりな表情のままシラを切るばかりで、何も答えてくれなかつた。そして何も言わずに教室から出て行つてしまつた。後を追いかけて廊下に飛び出しが、そこにはもうリーネの姿はなかつた。風のように、あるいは霧のようになつて、リーネは忽然と姿を消してしまつたのだ。

何でリーネがあんなことを言つたのか、分からぬ。

何でスズランがいなくなつたのか、分からぬ。

どこにスズランがいるのか、分からぬ。

どうすればいいのか、分からぬ。

分からぬ、分からぬ。

分からぬままガムシャラに探し回つてみたが、結局見つからなかつた。四時間探し回つても見つからなかつた。手がかりすら見つからなかつた。

そして家の近所の商店街を走り回つている最中に急に立ちくらみ、膝に力が入らないことに気付いて、亜紀雄はようやく自分の体力が限界に到つてゐることに思い至つたのだつた。

とりあえず家で空腹を満たして、少し休んでからもう一度探そう。そう、そうだ。もしかしたらあれはリーネの悪ふざけで、スズランは先に帰つているのかもしれない。

そんな思考に至り、亜紀雄は家に帰つたのだつたが、

やはり、スズランは帰つていない。

亜紀雄は力の入らない足を無理矢理動かしながら、自分の家の暗闇の廊下を、リビングに向かつて進んでいく。

考えてみれば、これが元々じやないか。

スズランが来る前は、これが当たり前だつたじやないか。

高校に入学し、この広い家で一人暮らしをするようになつてからは、この暗闇の玄関も、暗闇の廊下も、暗闇の部屋も、毎日目にするものだつた。見飽きるほど目したものだつた。これが当たり前

だった。

確かに、亜紀雄が中学一年の頃までは、この家で両親と弟と共に暮らしていた。どこにでもいる四人家族の一般家庭の一つとしてあるいは比較的恵まれているような状況で暮らしていた。

しかし、亜紀雄が中学三年に進級する春 すなわち亜紀雄の弟が小学校から中学校へ上がる時期になって、生活が一変した。

亜紀雄の弟 鞘河望^(のぞむ)は、俗に言つ『天才児』だったのだ

る。

小学生の時分から私立の有名校に通い、そこでもさらに逸脱した成績優秀。中学に進学するにあたって、世界的名門の学校を紹介されたのである。

亜紀雄の両親もそれに乗り気で、父親はそれに合わせて転勤を会社に申し出、運良くこれが通つた。望の私生活の面倒も見なければならぬということで、母親も同行することになり、家族四人揃つてアメリカに引っ越すことになったのである。

しかし何の才覚もない亜紀雄にとっては、この転校が至極ハードルの高いことだったことは言うまでもない。

英語で生活するだけでも大変なのに、その英語で授業まで受けなければならぬのは困難を極めた。亜紀雄は望とは違い近所の一般的な高校に入学したのだが、それでも勉強についてはいけなかつた。結局一年後、亜紀雄だけが日本に帰つてくることになつたのである。

元々天才である弟と比較され続け、自分を卑下することに馴れ親しみ、あまつさえ『歩くマイナス極』とまで呼ばれていた亜紀雄には、これは決定打となつた。

自分は敗者、愚者、負け犬、無力、無意味、無価値、不毛、不必要 そう思い知り、認識し、認証し、確証を得るには十分な出来事だつた。

両親の期待に応えるどころか期待すらされず、しかも単なる予定や予想や予測すら裏切つてしまつた。負担をかけた。迷惑をかけた。

ここまで恥を晒しておいて、それでものうと生きていて、一
体自分は何なんだろうか？ 何様なんだろうか？

今までずっと嘲笑され続けていた。

今までずっと侮蔑され続けていた。

今までずっと否定され続けていた。

自分が生きる意味が分からぬ。

生き続いている意味が分からぬ。

自分が存続している意味が分からぬ。

自分が存在価値が見えぬ。

自分の存在理由が見えぬ。

自分の存在意義が見えぬ。

アメリカでは、両親と弟の三人で和気藹々と暮らしている。未来に期待して生きている。輝かしい未来を目指して生きている。

しかし、自分はこの暗く静かな家で、一人侘しく生きている。

当然だ。当然で当然で当然なことだ。予定を予想を予測を裏切り、負担をかけて、迷惑をかけて、それ以上に自分は何を求める権利があるというのだろう？ 何を望んでいいというのだろう？ 何を願つていいというのだろう？

自分は一体何を考えて生きていけば

と、ここで畠紀雄はふと気付いた。

今日は、このネガティブな逡巡が切れない。止まらない。停まらない。やけに長い。やけに永い。やけに不快で、やけに深い。やけに苦しい。

そうか、これもスズランがないから。

思えばこの一ヶ月、この後ろ向きな思考をいつも遮っていたのはスズランだった。悩む暇もないくらい、スズランは何かしらを引き

起こしていた。部屋の中でドラを鳴らしたり、人の弁当を盗み食いしたり、男子を大人數手玉にとつていたり。そんなことを引き起こし、考える暇も与えてくれなかつた。

だが、そんな日々ももう終わりかもしれない。

スズランがいなければ、部屋の中でドラが鳴り響くこともないし、毎朝通勤ラッシュに巻き込まれるし、昼食は購買の弁當に戻るし、色恋沙汰で右往左往することもない。そんなアクシデントに巻き込まれることはなくなる
なくなる代わりに『歩くマイナス極』はさらなる負のベクトルへと進んでいく。

廊下を渡り、階段を登つて、いつの間にか亜紀雄は一階にある自分の部屋にたどり着いていた。

スズランが来てからやたらきれいになつたフローリングの部屋。整頓された棚。きちんとメイキングされたベッド。塵一つ落ちていな床。透き通るようなガラス窓。

もしこのままスズランがいなくなつたら、この部屋もまた元通りになつてしまふのだろうか。

亜紀雄は崩れ落ちるように、床の上にどすんと倒れこんだ
う、足に力が入らない。

上体を上げようとして床に腕をついたが、体が持ち上がりなかつた。手にも肩にも腕にも、力が入らない。

これは走り回つて疲れたから?

空腹だから?

それとも、スズランがいないから?

亜紀雄は眠りに落ちるように、墮ちるように、静かにまぶたを閉じた。

亜紀雄は眠りに落ちるまつて、壁あるよつて、静かにまぶたを閉じた。その瞬間、

ふわっ

頬に風が当たった。

亜紀雄は驚いて顔を上げる。

自分は部屋の中にはいる。空調は何も点けていない。そして窓もベルンダのガラス戸も完全に閉まっているはず。この空間に風が巻き起こるはずがない。

そう思いながら亜紀雄は目を凝らし、風を感じた方向ベランダの方を見やつた。

窓から差し込む月明かり。ゆらゆらと揺れるカーテン。半開きのガラスドア。そしてそこに佇む一つの影。よく見ると、それは

小麦色の散切り頭、高校の制服をまとった女の子。

「す、スズランッ！」

亜紀雄は起き上がり、影の方に駆け寄つた。

「ど、どうしたんだ、スズラン？　帰ってきたのか？　っていうか、どこに行つてたんだ？　というか、リーネさんが変なこと言つてて、君が帰つてこないなんて言つから」

「申し訳……ありま……せん……亜紀雄様」

スズランはサッシに手をかけ、床に片膝をついた姿勢で、息も絶え絶えに答えた。

その苦しそうな声にいぶかしみ、亜紀雄は改めてスズランの姿を見る。

スズランは、夕方見たときと同じように学校の制服を着ていた。が、その布は所々切られており、所々焦げており、頬や手は所々汚れていた。日常生活のみで被るような汚れ具合ではない。体育倉庫に閉じ込められた時ほどではなかつたが、それでも誰かと争つていたと感じるには十分すぎる状態だつた。

「な、何があつたんだ？」
「そんな傷だらけで……け、怪我して
るのか？」

申し訳ありません、亜紀雄様……」

「いや、だから何が申し訳ないんだッ？」
亜紀雄が声を荒げて言うと、スズランは視線を落として、まるで謝罪するかのように俯きながら、

私は、もう、あなた様の側に仕えることはできません

「……………え？……………何で……そんな、いきなり……ど、どうして？」

「彼らに見つかった以上、私がここに留まれば亞紀雄様まで危険にさらしてしまいます。彼らは使命を全うするためなら、いくばくかの犠牲はいとわないのです。恐らく、級友である亞紀雄様のことすら…………。ですから」

「ダツ！」

苛立ちに任せ、叫ぶよつた亞紀雄の声。

その声量に一瞬ひるんだスズランは、諦めたように息をふと吐

や、

「……そうですね。家臣ならば主に隠し事などもつての他。きちんとすべて説明せねばなりませんね。……分かりました。時間もありませんし、手短に説明させていただきます。まずはどこからそうですね、まだ亜紀雄様には精霊というものについて、お話ししておりませんでした。私は樹脂製人形に宿り人間界を生きている精霊ですが、精霊というのは日々、天命あるいは属性のようなものを持っています。それは自然に起因するもので、例えば草木や風、水などを育み愛しむことを存在意義としているのです。それは私も例外ではありません。私にも同るものがあり、それはすなわち死です」

「…………死？」

「はい。私は死の精霊。草木を枯らし、動物を息絶えさせることが私の使命。三百年前まで、私はこの世を歩き回り、周囲のすべてに死を与えて続けておりました」

スズランの説明に、亜紀雄は黙り込んだ。

「当然のこととく、死とはすべての生きとし生けるものが忌み嫌うもの。私自身、嫌われ、疎まれ、恐れられていました。しかし当の私は、ただ天命に沿つて動いているだけなので、そのような周囲の感情を意に介することもなく、ただ黙々と周囲を殺して回つておりました。孤立しながらも、それを気にすることなく、死を与えて続けておりました」

亜紀雄は話を聞きながら、スズランの顔を見つめている。

「当然、この『死』に抗おうとする者は少なくなく、私に対しても力に訴えてくる者さえいました。そのような者が現れるたび、私は傷つき、それでも死によつて彼らを滅ぼし、しかし傷が癒える間もなくまた攻撃を受け、それに対抗するように死を与えて、という日々を送っていました。今思えば、ひどく虚しい日々を送つておりました

しかし三百年前、私に転機が訪れました」

亜紀雄は少しづつ、顔を俯けていく。

「亞紀雄様の五代前の当主

　　鞆河隆久様によつて、私は人間

界に呼び出されたのです。……」
　　これはまつたくの偶然でした。隆久

様が部下に精靈を降ろす術を教わり、実際に試してみたのだそうです。そうしたら偶然、私のようなはぐれ者が降ろされたのです」

亞紀雄は無言。

「私も、当時の人の世のことは少なからず知つておりました。そして当時の人間界では戦が耐えなかつたことも……。降ろされた精靈は、降ろした主の命に従うことが必定。そして私の能力は『死』。ですから、隆久様は私を戦の前線に立たせ、敵軍を殺して回ることを命じるものだと思つておりました。　しかし隆久様はそのようなことは一切せず、私をいち家臣として側に置いてくださいました。道具ではなく、一己の存在として扱つてくださいました。私に声をかけ、私にものを尋ね、私の話に耳を傾け、頷き、そして私に笑いかけてくださいました」

亞紀雄はただ、無言。

「そこで私は、生まれて初めて心が安らかになるのを感じました。そしてそれと同時に、自分の心が今まで荒みきつっていたことをようやく知りました。それまでの日々が苦しいものだつたことに気付きました。悲しかつたことに感づきました。誰かに必要とされ、誰かを必要とし、誰かと共に生きていくこと。それがこんなにも心安いものであることを知り、またそれが私の願望であることを知りました。私の幸せであることを知りました。そしてそれを教えてくださいた隆久様に、深く深く感謝いたしました」

亞紀雄はただただ、無言。

「隆久様がご病氣で床に伏した折、その一瞬の混乱をついて東本家の者が私に襲い掛かり、あえなく私は精靈界に封じられてしまいましました

　　が、封の効力が切れるまでの三百年間、私は隆久様への恩を返すことばかり考えておりました。そして封が切れた瞬間、私は再度人間界に降り　　あなた様の元へ向かつたのです」

ここまで言うと、スズランは口を閉じた。

さつきまでずっと無言で話を聞いていた亞紀雄は、じりじりとやく

く口を開き、

「……今君を襲っているのは、つまりその『東本家』のやつなの力
？」

「そうです」

スズランは静かに首を縦に振った。

「彼らは、人間に害を『与える精靈に制裁を加える』ことを生業としてあります。そんな彼らには、私のような存在は存在しているだけで恐ろしいもの。この上ない危険因子なのです。恐らく私の封がこの時期に切れることは一族で伝えられていたのでしょう。だからこそ、私が人間界に再度降り立つてからふた月という短い期間で私を探し出し、私を消そうと動き出したのです」

「……どうやく、亞紀雄は合点がいった。

スズランを追いかけていた存在、東本家 つまりはあの転校生、東リーネがその黒幕なのだろう。最初亞紀雄が彼女の世話係を命じられたのは偶然だったはず。しかしその後、彼女はやたら亞紀雄とスズランに話しかけてきた。絡んできた。つっかかるってきた。おかしいとは思っていたんだ。

つまりは、東リーネは最初からスズランに目をつけ、スズランと一緒に近い存在である亞紀雄に近づいてきたのだろう。そして二週間ほど観察した後 つまりは今日、動き出したら、そういうことなのだろう。

「……じゃ、じゃあ、どうする？ 勝てそうにないの力？ だつたら、逃げるしかないナ。とりあえず待つてくし。荷物をまとめて、あとお金も 」

「なりません」

スズランは首を横に振った。

そして亞紀雄にしなだれるように近づいてきて、腕を肩にかけ、額を胸に当てて、抱きこむように体重をかけてきた。それが人形だとは信じられないくらいの柔らかく温かな感触が、服を伝わってく

る。

「危険です。亜紀雄様を危険に晒すなど、隆久様に申し訳が立ちません。亜紀雄様はここに留まつていてください。決してここから動かないでください。彼らの標的は私のみ。私が離れていれば、あなた様に危険が及ぶことはないはずです」

亜紀雄を抱えるスズランの腕に、ぎゅっと力が入った。

「……恐らく、私はこの世から消滅するでしょう。三三百年前は何とか封じられるのみで助かりましたが、今度の相手は比べ物にならないほどの手練です。私が人間界は愚か、精霊界からも消えてなくなることはもはや避けられません。僅かしかあなた様にお仕えできず、申し訳ありませんでした。この一ヶ月、恐縮ながら大変楽しい日々を過ごさせていただきました。これからあなた様のお世話をできなことは心残りですが、後悔は何もありません。私が消え去った後も、私の心は常にあなたと共にあります。どうぞ『自愛くださいませ。それだけが私の願いです』

透き通るような声でそこまで言つと、スズランはゆっくりと腕をほどいた。

そして亜紀雄に、毎朝出かける間際に見せていた愛しむような微笑を見せ、

「さようなら」

そう言った瞬間、ぶわっと風が巻き起つた。

亜紀雄が驚いて目を閉じ、そして再度目を開けると、

もうそこには、誰もいなかつた。

第五話「逡巡」

僕に出来ることなんて、この世にこれまであるのだろうか？
今この時、スズランのためにできることなどあるのだろうか？

一つ以上あるのだろうか？

一つでもあるのだろうか？

あるだろうか？

「ある」という返答への肯定が
「ない」という返答への否定が

あるだろうか？

あるだろうか？

あるだろうか？

。 。 。

。 。 。

。 。 。

今まで一つだって、あつた試しがない。

スズランのためにできたことなんて、僕には何一つなかつた
んだ。

スズランのためにできることなんて、僕には何一つないんだ。

分かつていて。

分かつていて。

分かつていて。

スズランに比べて、僕は無価値。

スズランにとって、僕は無価値。

スズランに比べて、僕は無意味。

スズランにとって、僕は無意味。
誰にとつても、僕は無価値。

誰にとつても、僕は無意味。

僕の存在意義など皆無。

ここにいるのは僕でなくてもいい。

だったら、なぜ僕は生きているのだろうか？

なぜ僕は、わざわざ生きているのだろう？

分かつていてる。

分かつていてる。

分かつていてる。

僕がくだらないから。

僕がくだらない存在だから。

無価値だから、無意味だから。

だから、

そんな僕を慈しみ愛しむものなど、何もない。

ない。

ない。

ない。

あるはずもない。

輝かしい微笑の裏側で、毒づかれていたこと。

友情や愛情だと信じていたものが、完全なまやかしだったこ

と。

人一倍的好意で接してみたが、拒絶されたこと。

そんな経験など、数え切れないほどある。

多すぎて数えていないだけ。

そう、結局

自分を救うのは自分だけ。

自分が救うのは自分だけ。

自分を救うのは自分だけ。

自分が救うのは自分だけ。

自分を救うのは自分だけ。

自分が救うのは自分だけ。

自分が救うのは自分だけ。

自分が救うのは自分だけ。

……ただ、それだけだ。

第六話「来訪者」　その一

あれから、どれくらいの時間が経つだらうか？

部屋は真っ暗なまま。カーテンだけが夜風にそよいでいる。ベランダの扉は開け放したままで、彼方から犬の遠吠えが聞こえてきた。亜紀雄はゆっくりと立ち上がった。

暗がりの中、目を凝らして壁にかかっている時計を見ると、十一時。放課後の掃除が終わつたのが確か夕方五時頃。それから四時間スズランを探し回り、家に帰つた直後に、ここでスズランに遭遇した。

つまり、ここで一時間以上呆けていたのか。

とりあえず亜紀雄はベランダの扉を閉めて、冷たい夜風を遮つた。
…………恐らく、ここに来る来訪者はもういない。もう現れない。そう思つた。

活動を再開したはいいが、しかしそまだ頭の整理がついていない。これから指針は立つてない。亜紀雄は考えもなしに、半ば条件反射のように部屋を出た。

廊下に出ると、キンコーンというチャイムが絶え間なく鳴つてい。る。その音の鳴る間隔からして、遠慮が微塵も感じられない。まるで亜紀雄がここにいることが最初から分かつているかのように、催促するようにやかましく響いている。

どうか、意識が戻つたのは、この音のせいか。

亜紀雄は嘆息しながらトントンと階段を下りていった。そして一階の廊下の壁に備わつてゐる玄関のモニターを覗き込む。そこに映つているのは、ポニー・テールの女子生徒。

鮮明な画像ではなかつたので、最初はそれが誰なのか分からなかつた。まじまじとその人物の挙動を観察し、見知つた顔を一人一人当てはじめて、亜紀雄はようやく思い至つた。

「……花塚さん？」

この髪型と割合小柄な体躯は、同じ体育委員の所属する一年生、花塚まいみだ。

何でウチを訪ねてきたんだ？

彼女は別に、亜紀雄とそれほど親しいわけではない。委員会の時に、席が隣だからという理由で話す程度。あるいは時折、廊下ですれ違った時に声をかけたりするが、しかしそれだけだ。

「……何の用だ？」

亜紀雄は首をかしげながら、玄関に出向き、チエーンを外してドアを開けた。

扉の奥から顔を出したまいみの第一声、

「も～、いるんなら早く出てくださいよー！」

「え？ いや、ごめん……」

亜紀雄はぽかんとしながら謝った。

「……とこりうか、どうしたの、こんな時間に？ 何の用？」

「これです」

そう言つて、まいみは一枚のプリントを差し出してきた。

渡されるままに受け取つて、亜紀雄はそこに書いてある文字を読む。そこには「体育委員仕事分担表・訂正版」と書いてあった。

「今日の放課後、村雲先生に渡されたんです。なんかミスがあつたみたいで、直したから他の一年生の体育委員にも渡しつけて。しかも鞆河君とのクラス、変更のせいで明日の朝、校庭ラインマーク一係が増えてたんですよ。だから今日中に渡さなきゃと思つて、こうしてわざわざ持つてきたんです。あなたの友達に家の場所聞いて。これ渡しそびれてたら、明日鞆河君が怒られてたんですから、感謝してくださいよ？」

「あ、うん。ありがと」

「あと、三組のもつ一人の体育委員はズズランさんだつたけど、一緒に住んでるんでしょう？ なら、これで問題ないですよ」

まいみの言葉の途中、その「ズズラン」という単語に呼応するよう、はらりと、亜紀雄の手からプリントが滑り落ちた。

「亜紀雄はハツとして、慌ててしゃがみこみ、「あ、ごめん」とプリントを拾つた。

まいみは、亜紀雄のその腑抜けたような、気の抜けたような仕草にいぶかしんだ視線を向け、

「……？　どうしたんです？　何か、変ですよ？　何かあつたんですか？」

「え？　いや、まあ、なんといつか……」

亜紀雄はしゃがみこんだまま、地面に視線を落として、「その、まあ……色々あつてね。その……スズランはいないんだ。いなくなつたといふか……帰つちゃつたんだよネ。その……彼女の両親のところに。だから、体育委員も僕一人つてことになつちゃつて……あ、いや、そんな深刻なことじやなく、その、家庭の事情で仕方なくといふか」「

「嘘ですね」

腰に手を当て、まるで諭すようにまいみは言い放つた。

「その『仕方なく』つていうのは嘘です。『仕方なく』ではあります。鞆河君が何もできなかつたから　　いえ、何もしなかつたから、スズランさんはいなくなつちゃつたんじゃないですか？」

「……へ？　いや……何を言つてるんだ？　別にそんな……深刻なことじやなくて、本当に」

「隠したつて無駄です。顔を見れば分かりますよ。……まったく、前々から思つてましたけど、前々から言つてましたけど、鞆河君つて本当にウジ虫ですよね。ウジウジウジウジ。ウジ虫以上のウジ具合ですよ。ウジウジ界の世界チャンピオンです。もう少し何とかならないんですか？　そんなんだから、いつでもどこでもなーんにもできないんですよ。何にもしないんですよ。そんなんだから、スズランさんもいなくなつて」

「う、うるさい…」

亜紀雄はがばっと立ち上がり、吐き捨てるように叫んだ。
「な、なんだよ、いきなり！ 人を真っ向から否定して！ 何も事情を知らないくせに！ さっきまで僕がどれだけ必死に走り回ったか知らないくせに！」

「知つてますよ、『歩くマイナス極』さん」

まいみの平然とした返答。

その冷たく苦しく狂おしい声音と響きに、亜紀雄は思わず下を向いた。

「知つてます、知つてます、ゼーんぶ知つてます。分かつてます。
鞘河君の傾向は。鞘河君の意向は。鞘河君の中は。まったくもう……過去に失敗したから、自分を否定されたから、否定されたのが怖かつたから、だから自分で自分を否定してしまえばいいなんて、ホント考えなしです。無価値です。無意味です。逃げてるだけじゃないですか、そんなの。裏切られるのが怖いから、否定されるのが怖いから、失敗するのが怖いから、だから自分の未来に期待をしない。そうやって生きていて、一体何ができるって言つんです？ 一体何が守れるって言つんです？ 一体誰のことを守れるって言つんです？」

まいみは、亜紀雄の記憶を見透かすように言葉を続ける。

「一番タチが悪いのが、自分でネガティブだと分かつていながら、それでもそれを変えようとしないことです。その生き方が決して幸せになれるものじゃないことも、自分の理想じゃないことも、自分の望むものじゃないことも、全部分かつてる。分かつてるくせに、それを変えない。怖いから、怖いから、怖いから、変えられない。いえ、変えられないと思い込んでいる。変えられないと信じ込んでいる。変えられないと自分に言い聞かせている。そんな生き方が不毛じやなくて、一体何だって言つんです？ そんな生き方が不憫じ

やなくて、一体何だつて言つんです？」

まいみは、亜紀雄の思考を見透かすように言葉を続ける。

「いい例が、そう、鞆河君が今もまだここにいることです。何もせず、ただここに立ち尽くして居ることです。……あなた、一体何してるんですか？『僕には何もできない』なんて、そんなのはただの言い訳です。屁理屈です。戯言です。『何か』をしなければならないんじやないですか？今すぐやらなければならんじやないですか？何であなたは今も、こんなところにいるんですか？こんなところで立つて居るんですか？」

まいみは、亜紀雄の心を見透かすように言葉を続ける。

「少なくとも、スズランさんといったときの鞆河君は正直でした。誠心誠意、スズランさんの言動にツツコんでいましたよ。…………いえ、これはバカにしてるわけじやありません。納得して居るんです。感心して居るんです。感動して居るんです。内側で「ちや」ちや呻いているあなたが、悩んでるあなたが、言い訳してるあなたが、こんなに誠実に真面目にしゃべっているなんて、怒っているなんて、笑っているなんて。傍から見ててそう思いました。納得しました。感心しました。感動しました。…………鞆河君、スズランさんといて楽しかったんじょ？」

亜紀雄は首肯。

「スズランさんに大切にされて嬉しかったんじょ？」

首肯。

「スズランさんと一緒にいて幸せだったんじょ？」

首肯。

「スズランさんと一緒にいたいと思つてるんじょ？」

首肯。

「スズランさんを大切にしたいと思つてるんじょ？」

首肯。

「スズランさんが傷つくのは見たくないんじょ？」

首肯。

「スズランさんが苦しむのは見たくないんでしょう？」

首肯。

「スズランさんが悲しむのは見たくないんでしょう？」

首肯。

「スズランさんがいなくなるのは嫌なんでしょう？」

亜紀雄は、首肯。

「…………だつたら、鞆河君が今びつするべきか、分かりますね？
分かつてますね？ これ以上、何も言つ必要はありませんね？
…………ではでは、これは鞆河君とスズランさんのことですから、
君と彼女のお話ですから、外野たる私はここに退場しますです。じ
やあ 頑張つてください」

微笑みながらうつむくと、花塚まいみは玄関を出で、扉をぱたん
と閉めた。

ドアの向いへ、石段を歩く足音も遠のいていく。
しばしへ玄関口に独り立ちてくしていた亜紀雄は、おもむろに手の
甲で頬を拭い、そして顔を上げて

前を向いた。

第六話「来訪者」　その一

午前零時を回り、もう終電も残っていないような時間。亞紀雄は高校にいた。

これには、別に根拠があつたわけではない。「ここにスズランがいるかもしれない」という予見が立っていたわけではない。むしろ、先刻一時間ほど探し回つても見つからなかつた場所だ。選択肢から外す方が普通である。

しかし亞紀雄は、なぜか「ここにスズランがいるのでは」と思った。

根拠などなく予見でもなく、ただ何となくそう思つたからというだけ。感じたというだけ。それだけの感覚をもとに、亞紀雄はここにやつてきたのだった。

当然のごとく、校門は施錠されている。

学校の外周。亞紀雄はあまり人目につかない場所を選んで、塀を乗り越えた。身長の倍くらいはある石塀で、おまけに手をかけるところも申し訳程度しかなく、飛び越えるのはなかなかに難しかつたが、手を擦りむきつつ膝を擦りむきつつ、亞紀雄はどうにか学校の敷地内に入り込んだ。

校舎に向かつて駆けていく間、ふと顔を上げると、その屋上に人影が見えた。人影が動いたような気がした。

遠い上に暗くて、それは確証を持つて言えることではないが、しかしそこに何かがいる。誰かがいる。誰かが動いている。

亞紀雄は眉をひそめた。

誰だろう？　何をしてるんだろう？　こんな時間に、あんな場所に、人がいるなんて、人が活動しているなんて

亞紀雄が疑いを抱くには十分すぎる根拠だった。

まずは建物内に入ろうと、亞紀雄は校舎の玄関口に向かつた。が、やはりドアはすべて閉められていて、鍵がしっかりと掛かっている。

ガラスを割るのは最終手段と思いつつ、周囲の窓を一つ一つ確かめていくて、亜紀雄はようやく一つ、鍵を掛け忘れていた窓を発見した。

ガラガラと窓を開き、亜紀雄は早速そこから「ゴンゴン」と這いつよいに建物の中に入る。

深夜の学校。灯りのない廊下。

怪談話が創生されるのも頷けるほど、不気味な雰囲気を漂わせていた。今にも火の玉が浮かんできそうな背景。その静寂の中、トタタツという靴下でタイルを踏む音を鳴らしながら、亜紀雄は廊下を進んでいく。

目指すは屋上。

上階を目指すなら、階段を登らなければならない。屋上へ向かおうと、亜紀雄は当然のごとく階段を登り始めた。

暗闇の中、つまずかないように一段ずつ登つっていく。

登ることに屋上に近づくことに、一体屋上に何がいるのか、スズランはいるのか、あの人物は何をしていたのか、スズランは何をしているのか、スズランは無事なのか、その推測と推論と困惑と混乱を繰り返しながら、この後の展開への期待と緊張を抱え、一階、二階と通り過ぎ、そして二階と三階の間の踊り場に到達したところで

いきなり、冷風が吹き荒れた。

「うわっ？」

冷たい、というより痛いという感覚が肌を伝わる。顔、首、手

露出部分全体が痛覚と化した。

亜紀雄は反射的に顔を腕で庇つた。が、顔は守られても今度は腕に痛みが突き刺さる。まるで防御になつていない。

これは攻撃なのかトラップなのか、誰の仕業なのかどんな技なのか、と亜紀雄が思考を巡らしていると、

風はすぐに止んだ。

まるで「これはただの威嚇」とでも言つよつた短時間。そりと田を開け、風上の方へ視線を動かすと、そこに立っていたのは長身の男。白髪、白い肌、真っ白なワイシャツとジーンズ。冷め切つた青白い目で、亜紀雄を眺めている。

「な、何だ？　君は……」

「主……の命により、お前をとおせんぼする」

白い男は無感動な田を亜紀雄に向かながら、抑揚のない声で答えた。

亜紀雄は険しい表情を崩さないまま、

「……君の主つていつのは　」

「私デスよ」

突然、聞きた女性声。

声がした方を向くと、白服男の左、屋上へ続く階段から一段一段降りてくる、ブロンズヘアの女子生徒。うつすらと笑みを浮かべながら　東リーネが現れた。

「アキオ、どうしたんデスか？　こんな時間に、こんなところで？」

「じらじらしいことを言つナ！　分かつてんんだ！　お前がここに

いるつてことは、ズズランもここにいるんだ口！」

「ウフフン。なるほどなるほど、そうデスかそうデスか」

リーネはやれやれと言わんばかりに首を横に振り、

「まったく……アキオ、まだ諦めてなかつたんデスか？」

「あ、諦めるわけないだ口！」

亜紀雄は叫ぶ。

「お前、スズランをどうしようつていうんだヨ！　仕事だか生業だ
か知らないけど、そんなこと許すわけないだ口！」

「アナタの許しなんか、別に関係ありません。これは東家の使命なんデス」

「な、何が使命ダ！ 何でスズランを消そうとするんダ？ お前だつて、スズランを一週間近くで見てたんだ口？ だったら分かるだ口？ 今あいつに、危険なところなんて一つもない！ 消す必要なんてないだ口！」

「分かつてませんね～」

リーネは手の平を上に向けながら、疲れたようなため息をついた。
「スズランさんにそういう能力がある以上、危険なことには変わりないんデス。今がどうでも、それは関係ないんデスよ」

「それはどういう」

「これは仮定の話デスが、あくまで仮定の話デスが、例えばスズランさんがアキオに恋愛感情を抱いたとしまショウ。スズランさんとアキオが正真正銘の恋人同士になつたとしまショウ。これは、人間と精霊の種族を超えた愛の物語。なんてキレイ事では済まされないんデスよ。そんな状態で、もしアキオが誰かに傷つけられたとしたら、どうなりマスか？ 殺されたとしたらどうなりマスか？ スズランさんはどうするでショウか？明白デス。明らかデス。彼女は自分の精霊としての能力を使って、必ずや敵討ちをする。あなたの仇討ちをする。そう、スズランさんは 人を殺すはずデス」

リーネはりんとした声で説明を続ける。

「精霊による人殺し これを止めるのが、私たち東家の使命なのデス。人間は人間に裁かせる。それ以外の余計な混乱を起こさない。そうやって人の世を守るのが、我々の仕事。.....しかもスズランさんは、封が途切れた瞬間、一目散に人間界へ舞い戻つてきました。彼女は人間界にいようとスル。だから、彼女の存在は極めて危険なのデス」

「で、でもそれは仮定の話だ口！ 僕とスズランが恋人にだなんて

「残念ながら、これはそれほど低確率な話ではないんデスよ。私はアナタ方を一週間見てマシタ。アナタ方のことを一週間、近くで観

察させてもらいまシタ。そして分かりマシタ。確かに、今のアナタ方はそんな口マンチックな関係ではありまセンね。スズランさんが好き勝手やつて、それをアナタが止めて。それの繰り返しデス。それの繰り返しでしかありまセン。…………でも、オカメハチモクつていうんですか？ もしかしたらあなた自身も分かっているのではないデスか？ 私には、そういう兆候が見えマシタ。私には確認できマシタ

「…………ちゅう…………う…………？」

「田」にその確率は大きくなつていいく。だから、歯止めが利くうちにそれを止めるのデス。アナタ方のために、今のうちに止めるのデス。止められなくなる前に、止めるのデス。お分かりいただけましたか？ ……………では、理解できたなら、そのままそこで動かないで

「わ、分かるわけないだ口！」

叫び声と共に、亜紀雄は睨むような目つきでリーネを見据える。「将来のことなんて知らないけど、知ったこっちゃないけど、今でも、僕とあいつは主と精霊なんだ！ すでにそういう縛は

「主？」

リーネは、尻上がりのイントネーションで聞き返してきた。そして亜紀雄にあからさまな嘲笑を向け、

「ウフフ、ウフフフフ。アキオ、どうやらアナタは、まだ『精霊』というものに関して、十分理解できていないようデスね。残念ながらアナタは、スズランさんの本当の主ないのデス。実質的な主ではあります。アナタ方二人には、今のところそういう関係性はないのデスよ」

「……は？ 何を言つてるんだ？ あいつは僕に仕えてるってことだ口？ 僕はともかくとして、あいつはいつもそういう表現をしていタ。僕があいつの主じゃないなんて、何を根拠に？」

「根拠デスか？ 根拠ならちゃんとありマス。ありマスよ。そう

アナタが今まで、ここにたどり着けなかつたことデス。

私とスズランさんは、アナタがこの学校を出てからずつとここにいマシタ。六時間ここにいマシタ まあ、一度逃げられたりもしたのデスが しかしその間、アナタはここにたどり着けなカツタ。スズランさんはここにいるのに、それを探し出せなカツタ。それが根拠デス

「そ、それはどういう 」

「ふう……少し話しあきましたね。私は早く職務を遂行しなければ。では、私はこれで失礼しまス。…………正直なところ、私はアキオの、その周囲のすべてと距離をとつていい生き方は、案外気に入っているのデス。クールなのデス。私の好きなタイプだつたりするのデス。できれば私は、アナタのことは傷つけたくない。…………だから、あまりこのコネアに抵抗しないでくだサイね？ お願いしまス」

そこまでいふと、リーネはくるりと制服のスカートをひるがえしながら振り返り、何も言わずに階段を登つていつた。
それを追いかけるように、

「ま、待つて 」

と亜紀雄が前へ駆け出した瞬間、

ブオッ

冷風が吹き、亜紀雄はそれ以上進めなくなつた。

「この……先には、行かせない」

そう咳きながら、白髪で上背の男 ユネアは、亜紀雄に向かつて右手をかざす。その手の平からは、寒風が吹き続ける。

「これしき……」

顔を腕で覆い、体勢を低くしながら、亜紀雄は風に抗うようじにジリジリと前へ進んでいく。

しかしユネアは相変わらずの無表情で、

「無……駄」

呟くように言いながら、左手を振り上げた

その手の中に

現れる、氷の刃。

「恨……むな」

眩きと共に、コネアはその青白い円錐を亞紀雄に向かって投げつけた。

風で加速され、亞紀雄の腹部に向かつて一直線に向かう刃。その切つ先が服にあと一センチと迫ったところで

がちゃんと

その氷刀は勢いを殺され粉々になつて、床に落ちた。

その予想外の事象に、弱まる冷風。

亞紀雄が驚きながら、首を右に回すと、そのすぐ横に現れた人影

「おやまあ、面白いことになつてるね」

氷のつらりを叩き落した右手の甲をさすりながら、突然現れたその男は、皮肉な笑みを亞紀雄に向けた。

「こ、小林君！」

いつも見慣れたクラスメイト、東加々美といつもつつかかり合っている人物、黒髪を耳元眉下までのばした男子生徒 小林雑音に、亞紀雄は驚愕の表情を返す。

「……な、何で小林君がこんなところに？」

「いや、おもしろそうな予感がしてね」

口元を歪めた笑みを亞紀雄に向けながら、雑音は軽い調子で答えた。そしてじつとこちらを睨みつけている白男、コネアへと視線を移し、

「そうだね。まあ……この前のお礼もあるし、ここは僕が何とかしてあげるよ」

「小林君が？ あいつを？ で、できるの？ ……というか、

お礼つて、僕、小林君に何か感謝されたことつてしたつけ？

「い、いいんだよ！ 君はとにかく屋上に行けば！ ほらー！ 手遅れになる前に！」

「ええつ？ あ、うん……」

いきなり怒られ、戸惑う亜紀雄。

困惑しつつも、言われるままに促されるままに、亜紀雄が屋上への階段へと駆け出そうとしたとき、

「あ、ちょっと待った」

雑音が亜紀雄の腕を掴んだ。

「な、何？ 小林君」

「これ、これ持つてきな」

そう言つて、雑音は亜紀雄に一枚の紙切れを握らせた。

亜紀雄が何だろうと思つて持ち上げると、それは縦長の白い紙に赤い文様が書いてあり、真ん中には草書で（読みないが）文字と思われるものが書いてある。神社でもよく見かける、ステレオタイプなお札のようなものだった。

「……え？ これは？」

「見たまんまのお札だよ。これを精霊の急所に触れさせれば、精霊界に返すことができる」

「え？ そうなの？ というか、精霊つて、小林君」

「ほらほら、早く行きなつて。手遅れになる前に」

雑音は払うように手を振つた。

亜紀雄は何一つ理解できていなかつたが、お札を握りなおし、とにかく登り階段へと走つていつた。

タタタッと、亜紀雄はユネアの横を通り過ぎる。

しかしユネアは反応しない。亜紀雄にも一定の意識は向けているが、顔をそちらに向けることもせず、動かずに、じっと音の方を睨んでいる。

亜紀雄は階段を登りきり、ドアを開けて屋上へと行つてしまつた。バタンッ、とドアが閉まる音。亜紀雄がこの空間から消えたとこ

ろで、ようやく

「お前……何者？」

ユネアが言葉を発する。

雑音は、その質問にふふんと笑いつつ、
「察しの通り、邪魔者だよ」

「ふん」

ユネアは鼻で笑った。

「邪……魔？ 氷刀を見切つたところからも、お前がそれなりに嗜んでいることは分かるが、しかしそれだけで慢心するのは早いぞ。そんな丸腰で、俺の能力に抗えるとでも思つていいのか？」

「丸腰？ 別に丸腰じやないさ」

雑音は首を傾げ、茶化すような笑みで答えた。

「お前……に、一体何が

と、ユネアが言いかけたところで、ふいに遠くから風を叩く音が聞こえてきた。

バサンツ。

バサンツ、バサンツ。

バサンツ、バサンツ、バサンツ。

バサンツ、バサンツ、バサンツ、バサンツ。

バサンツ、バサンツ、バサンツ、バサンツ、バサンツ。

その音は段々大きくなり、やがて雑音の左側、踊り場の壁の上方にある、小さな窓に黒い影が現れた。

閉め忘れたのだろう、半分だけ開いているガラス窓。

その影は窓をぐぐると、再度風を叩いて雑音の方に近づいていき、そして雑音の右肩に止まった。

窓から差し込む月明かりに照らされたその影は

暗黒色のくちばしに短刀をくわえた、やたらに大きなカラスだった。

「……つたく、何でお前はいつも突然的に俺を使うんだ？」

「悪いとは思つてゐよ」

肩の上でしゃがれ声の言葉を発したそのカラスに、雑音は苦笑を返す。

そのカラスは反目で雑音を眺めながら、

「ほれ、小僧。持つてきてやつただ」

「さんきゅー、ストロウ」

カラスがくちばしを開けると同時に自由落下を始めたその短刀を、雑音はすとんと右手で受け止めた。

「お……前」

突如現れた人語を話すカラス　　ストロウを眺め、ユネアはいよいよ顔に警戒色を示す。険しく厳しい表情。やや体勢を低くし、前屈みになつて、明らかな臨戦態勢をとつた。

その雰囲気の変化を見止めた雑音は、

「ふん、ようやくもつて僕のことが理解できたかな?
はでは、そろそろ始めようか。…………言つておくけど
」

短刀を握り締め、口元に笑みを残しつつもユネアに鋭い視線を向けながら、

「わら藁にすがつても、もう遅いよ」

第七話「屋上にて」　その一

亜紀雄は、勢いよく鉄の扉を開けた。
開ける視界。

星空。遠方の街明かり。手すりに囲まれた長方形。そして、そこにいる三人　　ブロンズの髪を夜風に流している東リーネ、その側に寄り添うように立っている紅色の和服をまとった少女、あとは　彼女らから少し離れたところで、地面に突っ伏しているスズラン。

「す、スズランッ！」

亜紀雄はスズランの方へ思わず駆け出します。が、

リンッ

和服の少女が、鈴の音と共に扇子を振つた瞬間、キンッという鼓膜に突き刺さる音と共に、亜紀雄の右半身に　　ドシンッ、とう、重い衝撃。

「ぐあっ……」

砲丸の直撃を食らつたように、横に吹き飛ばされる亜紀雄の体。そのまま地面を数メートルスライドした。

「……ぐ…………てて」

「まったく、もう少しで終わるのデスが……」

その様を無感動な瞳で眺めながら、リーネは無感情な声音で呟く。「ここまでくると、そのしぶとさと言つかしつこれと言うか、そろそろ感心してもいいかもと思いまス。アキオ、アナタは意外と諦めが悪いんデスね？」

「だから、諦めるわけがないって言つてるだろー！」

亜紀雄は体を起こしながら叫んだ。しかし、左肩に走る痛み。今 の衝撃でひねつたのかもしれない。

「くそつ……わざわざの白こやつといいつつといいつ、変な力使いやがつて……」

「ウフフ。そうデス。これが精霊の能力デス。人間にはない力デス。実際に食らつてみて、その強さ、そして恐ろしさを理解できマシタか？……もつとも彼らの能力も、スズランさんのそれに比べたら至極安全なものデス。なんせ彼女は『死』の精霊。その手で触れるだけで、すべての生きとし生けるものを殺せるのデスから。触れさせただけで『THE END』。そんな危険な能力、他に聞いたことがありマセン」

「だから、それを使わなければいいだけの話だろ！」

亜紀雄はすくっと立ち上がり、そしてスズランの方へ視線を移して、

「おい、スズラン！ 平氣かつ！」

スズランに呼びかけた。

スズランは顔を上げ、焦燥の表情を浮かべて必死に口を動かすが、「…………」

亜紀雄の耳には何も聞こえてこない。スズランの声を邪魔するような音はここには何もないはずなのに、声が伝わってこない。テレビを消音にしているように、唇だけがパクパク言っている。

「ど、どうしタ！ 何か言つてくれ！」

「無理デスよ」

亜紀雄とスズランのやり取りを制するように、リーネが薄ら笑いで口を挟んできた。

「スズランさんは現在、そこにいる和服の精霊 エン のテリトリーの中にいます。境界は見えていますが、彼女の半径一メートルには入れませんし、声も届きません。残念ながらスズランさんは逃げられませんし、アナタと彼女のコミュニケートは不可能デス」「……それがそいつの能力か」

「そうデス。ウフフ。どんな能力が分かりますか？」

まるで分かるはずないだろうとも言いたげな、リーネの嘲笑。

しかし亜紀雄はその笑みを無視して、再度スズランの方へ顔を向けた。

いつだかのように、両腕、そして片足が砕かれている。紙粘土を固めて砕いたような、崩壊部分。先刻家で見たとき以上に制服は破け、切られ、汚れ、廃れ、もうスズランには後がないことが、あと数分で存在が消えてしまつ対象であることが、見て取れる。見て取れてしまう。

相変わらず声は聞こえないが、スズランは必死な形相で、なおも叫び続けている。口を動かし続けている。その唇の動きを見るに、何で来たのですか、早く逃げてください そう言っているように見える。早く逃げるよう、訴えかけているように見える

そんなこと、できるわけないだろ！

最後に見るスズランが、こんな傷ついた姿だなんて……。

リーネは、唇をぎゅっと噛んだ亜紀雄の顔を一瞥し、

「そうですね。エンの能力について、何ならヒントでも差し上げ

」

「 風か、音か、重力だろ？」

亜紀雄は、リーネを睨みつけながら断言。

その返答にリーネはぴくりと眉を動かし、次いで感心したような顔になつて、

「……へエ。何を根拠に？」

「見れば分かるだろ。スズランはそこまで顔に外傷は被っていない。ホコリで汚れてる程度で、口や首の周辺に攻撃を受けた様子はない。スズランの発声が止められているんじゃなく、明らかに『音』が遮られてる。じゃあ、『音』を遮るにはどうすればいいか？ 精霊が扱える自然現象に則つて、空気の振動たる『音』を遮るにはどんな方法があるか？…………そんなの、落ちこぼれの僕にだって分かる。風で空気の振動を止めるか、音 자체を操つて消し去るか、重力で空気の密度を大きくし振動を殺すか。この三つなら、さつき僕に向けてきた攻撃が何も見えなかつたことにも説明がつくしね

まあ、気圧がそこまで大きくなると、スズランは身動きがまつたく取れなくなつててるだろうから、十中八九、風か音だろ？」

「……ウフッ、ウフフ、アハ、アハハハ、アハハハハハハハ
リーネは堪えきれないように笑い声を上げ、

「さすがデス！ さすがデス、アキオ！ さすが私が見込んだだけのことはありマスね！ さすがデス！ 銳いデス！ ウフフ。実は今あなたが挙げた三つの能力は、私が対スズランさん用に考えていたものとぴったりなのデス！」

「対……スズラン用？」

「ええ、そうデス。さつき言った通り、スズランさんは触れただけで精靈すら殺せますからネ。必然的に遠距離攻撃が必要にナル。加えて、こちらは追う側。スズランさんを見失つたら負けデス。デスから、チャンスがあれば確実に当てられる攻撃が必要。相手にかわしづらい攻撃。つまり広範囲で、しかも見えない攻撃デス。そうなると、自然と今の三種類の能力が最適ということになるのデス」

「……やつぱり、音が風……」

「そうデス。そこまでは『名答』と言つておきまショウ。しかし」

ここにリーネは口の端を吊り上げ、

「能力の中身が分かつたところで、一体アナタに何ができるのデス？ スズランさんでさえ敗れたこのエンの能力に、人間であるアナタが一体どうやって太刀打ちできると言つのデス？ ウフフ。ありませんよ。そんな術なんか。たとえ

さつき小林さんから渡された『お札』を使つたとしても！」

「…………！」

亜紀雄は目を見開き、札を持っている左手を握り締めた。

「……な、何でそれを……」

「ウフフ。アキオはまだ知らなかつたのデシタね。別に難しいことではありません。聞けばそんなことかと納得することデス。つまりデスね、精靈とその主は、離れていても意思疎通ができるのデス」

「いし……そつう……？」

「はい、そうデス。だから、階下の状況は私にも分かっていたのデス。ユネアから聞いていたのデス。私とユネアは情報交換をしていたのデス。…………もっとも、今はもう分かりませんが。もう下の決着は着いているのデスよ。ユネアは敗れて、精霊界に返されたまいマシタ。別にユネアも戦闘には疎くないはずなんデスが、あつさり負けてしまいマシタ。たった三手。十秒足らずデシタよ。小林さんは恐ろしい人デスね。…………しかし、とつぐに決着がついてるのに屋上に現れないところを見ると、彼はもう帰ってしまったようデスね。良く分からぬ人デス。…………まあ、こちらとしてはありがたいことデスが」

リーネは自嘲的な笑みを浮かべた。

「さて、これで分かりマシタか、アキオ？　さつき私が『アナタは本当のスズランさんの主ではない』と言つた事？　その根拠？　そうデス。真に精霊と主の関係にあるならば、スズランさんとアナタは常にコミニケートできるはずなのデス。学校や町中を探し回つたりしなくとも、意識を飛ばしさえすれば、スズランさんに直接居場所を聞くことができたはずなのデス。スズランさんだって、わざわざ私達から逃れなくても、アナタに思いを伝えることはできたはずなのデス。しかし、アナタ方はそれをしなかつた　　できなかつた。あなた方は意思疎通がデキナイ。そう。眞の精霊と主ではないのデス。そんなアナタに、私達の仕事を邪魔する権利などないのデス」

リーネは亞紀雄の真正面に佇み、凍えるような聲音で言い放つた。

「さあ、分かりマシタか？　アキオ。理解できマシタか？　できたのなら　　」

「分かるわけないって言つてるだろ！」
亞紀雄は声を張り上げる。

「何度も何度も言わせるな！　そんな理由で、僕が納得するはずないだろ！　僕に何ができるとか、何ができないとか、そんなのは関係ないんだ！　僕に何があるとか、何がないとか、そんなのは理由

じゃないんだ！ 僕がどんな人間なのか、どんな人間じゃないのか、そんのは根拠にならないんだ！ 僕はただ、スズランが傷つくのを見るのが嫌なんだ！ スズランが苦しむのを見るのが嫌なんだ！ スズランが悲しむのを見るのが嫌なんだ！ スズランが傷つくのが嫌なんだ！ スズランが苦しむのが嫌なんだ！ スズランが悲しむのが嫌なんだ！ スズランと離れるのが嫌なんだ！ スズランがいなくなるのが嫌なんだ！ スズランを失うのが嫌なんだ！ 嫌なんだ！ 嫌なんだ！ 嫌なんだ！ それだけなんだ！ それだけでしかないんだ！」

亜紀雄は息継ぎもせず、

「お前はいつもいつも『分かりましたか？』『理解できましたか？』って、何度も何度も聞いてくるが、うるさいほど繰り返すが、分かつたら何だ！ 理解できたからどうした！ 先が見えたからどうした！ 可能性がないからどうした！ 僕に何ができるとか、何ができるないとか、そんのは関係ないんだ！ 僕に何があるとか、何がないとか、そんのは理由じゃないんだ！ 僕がどんな人間なのか、どんな人間じゃないのか、そんのは根拠にならないんだ！ 僕はただ　　僕はただ、スズランがいなくなるのが嫌なんだ！ 嫌なんだ！ 嫌なんだ！ それだけなんだ！」

ここまで一息で叫び終え、「……はあ、はあ」と呼吸が荒くなる亜紀雄。

ふとリーネから視線を横にずらし、スズランの方を見ると、相変わらず心配そうな心苦しそうな表情で口を動かしている。今の亜紀雄の発言へのリアクションは、まつたく見られない。

音が遮断されているということは、つまりこちらの声も届かないということ。

今の言葉がスズランに聞こえなかつたのは、よかつたのか、悪かつたのか……。もしくは、スズランには聞こえないと分かつていたからこそ、亜紀雄は真っ直ぐに言えたのかもしぬなかつた。

「言いますね～」

リーネは、頬を引きつらせた苦笑い。

「ここまで真正面から否定されると。何でしょう、これも失恋の一種なのデショウか？ だとしたら、ものすごく悲しいデスが……。しかしどうあれ、状況は変わりませンよ。私たちの優位性はそのままデス。それとも…………何か、状況を開拓する策でもあるのデスか？」

リーネは、亜紀雄に対して挑発的な微笑を向けてくる。

亜紀雄はその顔をじっと睨み、体勢を低くし、後ろ足を勢いよく蹴つて、

「さあね！」

前へ駆け出した。

超常的な能力を使う精霊と、精霊を使うことに長けた精霊使い。その力の全貌は亜紀雄には推し量るべくもない。一般人足る亜紀雄に理解できるわけもない。対抗策を考え付けるわけもない。

しかし、一つだけ覚えていた。

リーネのセリフ。

『精霊が人間を殺すことを止めるのが、東家の使命』

つまりリーネは、このエンドという精霊に亜紀雄を殺させない。死に到るほどの攻撃は加えない。少しば手加減が加わっているはず。亜紀雄がつけ入るのは、まさにそこだった そこだけだった。

それだけを期待して、地面を蹴り続ける亜紀雄。走り続ける亜紀雄。エンドに対してあと数メートルの距離へと迫ったところで、

リンッ

エンドは扇子を振った。そしてキンッという超高音が耳に響いたその瞬間、

亜紀雄はエンドに側面を向けて屈みこみ、腕で頭を庇つて、完全な防御の姿勢をとった。ダンゴ虫のような体勢。地面にしがみつき、

攻撃が当たる表面積を最小限にして、耐える戦法である。

予想通り、脇に加わった衝撃に亜紀雄は弾き飛ばされたが、二メートルほど空中を飛んだところで両手両足で踏ん張り、それ以上の後退を避ける。

そして迷わず、再度エンに向かって駆け出す亜紀雄。

エンが再び扇子を振り上げる前に、エンに向かつて左手を伸ばし、札を構えたところで ふと、亜紀雄は迷った。

どこに、この札を向ければいいんだ？

雑音の説明によると、この札は精霊の急所に当てる効果を発揮する。急所に触れさせることにより、精霊を人間界から返すことができる。つまり、この札をエンの急所に当てなければならぬ。

エンの急所ってどこだ？

どこに当たればいいんだ？

亜紀雄がその迷いに意識を奪われたその刹那の隙、リンク

エンは扇子を振り上げ、振り下ろし、直後、「つおつ！」

亜紀雄は吹き飛ばされた。

防御ができず、完全に体を持っていかれる。足が地面から離れた。紙風船をはたいたように、亜紀雄の体が宙に浮く。

そしてそのまま後方へと飛ばされていく

ガシャンッ

「ぐあつ！」

手すりにぶつかって、ようやく亜紀雄は着地した。

「…………てててて」

「まったく、命知らずなことをしますね～」

腰をさすりながら立ち上がった亜紀雄に、リーネは嘲るように言葉をかける。

「ここが屋上だつていうこと、忘れないでくださいね？ もしエン

が力加減を間違つたら、アナタはまつ逆さまなんデスよ？」

「……大丈夫です、主。ちゃんとギリギリを狙います」

「そうデスか。それは頼もしい。よろしくお願ひシマス」

透明な声で答えたエンに、リーネは微笑を向ける。

「くそつ……」

擦りむいた頬をぬぐいながら、亜紀雄はリーネとエンを睨みつける。

エンの能力、恐らく『音』で間違いないだろう。三回攻撃を受けて、三回とも キンッ という高音が聞こえてきた。つまり、この攻撃は高音を発している。十中八九、超音波によるもの。だからこそ高速で、避けることも叶わない。

しかも今の一連の攻防で、エンには力加減を覚えられてしまっただろう。

前には進めない、しかし致命傷は食らわず、手すりを飛び越えて屋上から落ちることもない これからはそういう攻撃になるはず。そういう攻撃しか来ないはず。もう、強行突破はできない。
「さ、アキオ。分かりましたでシヨ？ これ以上は無駄デス。これ以上バカな真似はしないでクダサイ」

確かに、

確かに、これ以外に手が浮かばない。

エンに札を当てる手段が他に考え付かない。

エンに再び近づく方法があるとも思えない。

エンの攻撃をかいぐぐる術があるわけもない。

どうしようもない。

どうしようもない、どうしようもない、どうしようもない。

どうしようもない、どうしようもない、どうしようもない。

ハ方塞、

袋のねずみ、

万事休す、

なす術なし、

もう本当に、どうしようもない

『 何でそんなところ立ってるんですか？』

急に、数時間前の花塚まいみのセリフが脳裏に甦ってきた。
『 そんなんだから、いつでもどこでもなーんにもできないんですよ』
このタイミングで、リフレインする。

『 そんな生き方が不毛じゃなくて、一体何だって言つんです？ そんな生き方が不憫じゃなくて、一体何だって言つんですか？』

痛かった言葉が、鼓膜に響く。

『 僕には何もできない なんて、ただの言い訳です
覚えていたくもない言葉なのに、鮮明に覚えている。
『 セツやつて生きていって、一体何ができるって言つんです？ 一体
何が守れるって言つんです？ 一体誰のことを守れるって言つんで
す？』

嫌になるくらい、鮮明に残っている。

『 何か をしなければならないんじゃないですか？』

そう、そうだ。

何ができるか、じゃない。
何もできない、じゃない。

そんなのは言い訳、
そんなのはへ理屈、
そんなのは戯言。

そう、そうだ。

『 何か をしなければ。

今、『 何か 』しなければ。
大丈夫、もう分かってる。
僕は一度と、立ち止まりやあしない。

亜紀雄は再び瞳に光を取り戻し あそこまで見透かされた
ように言われると、花塚さんは人の心が読めるんじゃないかと思え

てくるナ エンに向かって構えた。鋭い眼光を向け、半身になつて体の重心を落とす。

その様子を見て、

「……アキオ。まだ分からんデスか？ これ以上は、本当に無意味デス。これ以上のやり取りは無価値デス。疲れませんか？ ……ハア。まあいいデス。次で終わりにしまショウ。 エン、気を失う程度の攻撃にコントロールできマスか？」

「……問題ありません」

エンの、透き通るような声での返答。扇子を肩まで振り上げ、構えた。見まじうこともない、完全絶無の攻撃態勢。

静かな威圧感と緊張感をまとつたその構えを見せられ、次はどうすればいい？

と、うろたえかけた、迷いかけた、惑いかけた、その瞬間

『何か』をしなければならないんぢやないですか？

考えるよりも早く、意識するよりも早く、亜紀雄は前へ駆け出した。振り下ろされるエンの扇子。

リンク

鈴の音と共にキンッという音がアキオの耳に届いた

次瞬、

亜紀雄はいつの間にか、ブレザーを脱いでいた。

そしてそのままその上着を空中に放り投げる。ばさばさと広がる布地。亜紀雄の視界は完全に紺色になった その時、

亜紀雄は身を屈め、ブレザーの影に全身を隠した。

ブレザーの布地を貫通して、衝撃が亜紀雄の半身に届くしかし、その威力は格段に弱い。弱くなつていて。ゼロではないが、百パーセントでもない。吹き飛ばされるほどではない。

そう、これは吸音。

例えば布団にくるまつてていると声がほとんど外に届かないように、柔らかい布地には音を吸収する効果がある。音を殺す効果がある。

敵の能力が『音』だとわかつてているなら、こういう手段もある

これは突拍子もない、瞬間的な思い付きだった。

果たしてブレザーの薄い布地で一体どれだけの効果が得られるかは疑問だつたが、ある種の賭けだつたが、結果うまくいった。そこまで大幅に衝撃は殺せなかつたが、それでも十分だつた。

亞紀雄は駆けていた勢いを殺されつつも後方に少し跳ばされつとも、しかし体勢を崩すことなく、再度地面を蹴る。

そしてエンに届くまで一メートル、一メートルと近づいたところ、亞紀雄は札を握った右手を前へ突き出した、が

これをどこに当てればいい？

精霊の急所はどこだ？

エンの急所はどこだ？

田の前では、エンが扇子を振り上げ、二度目の攻撃に移っている。

どこだ？

エンの振り下ろす扇子の動きが、

どこだ？

スローモーションで、コマ送りで、

どこだ？

少しずつ下へと、

一体この札をどこに当てれば？

下がつていく。

どこに当てればいいんだ！

『……の……は……』

『……の……は……』

『え……の……は……た』

『……んの……しょせ……か……』

『えんの……は……肩』

『……の急所は……肩』

ど……こ……

『エンの急所は右肩です！ 亜紀雄様！』

精神の奥底から浮かび上がるような 韶き渡るような 奮い
起こすような 拭い去るような 駆け抜けるような 煌くよ
うな 瞬くような 輝くような はためくような 謎づよ
うな 踊るような 果てるような 澄み渡るような声にハッ
とし、亜紀雄はエンの動作よりも早く、右手を真っ直ぐ前に突き出
す。

エンの右肩に触れる札 その瞬間、

「あやつ？」

驚きの声と共に、エンの体が青白い光を放ち始めた。

「ちよ、そんな、エン！」

そんなりーネの叫び声に構う暇もなく、亜紀雄は眼前の光を遮ろ
うと顔を背けて、腕で頭を覆う。

四方に飛び散る光。
巻き込まれる周囲。
視界が真っ白になる。

そしてショーンといふ音がした後
た。

辺りは再び静寂に包まれ

第七話「屋上にて」　　その一

「はあ、はあ、はあ、はあ…………」

人影がもはや三つしか見えない校舎の屋上。

亜紀雄は腰が砕けたように、地面にへたりこんでいる。

目の前には、紅色の着物をまとった日本人形。眠るように、くたりとコンクリートの上に倒れている。それはもはや人形であり、人形でしかなく、人形でしかないため、それ以上動くわけもなかつた。

「…………はあ、はあ、はあ、はあ」

「亜紀雄様！」

聞き慣れた声で名前を呼ばれて、亜紀雄は驚いた　何よりも誰よりも聞き慣れた声で呼ばれたこそ、亜紀雄は驚いたのだつた。首を回して振り返ると、砕けた腕で上体を起こしているスズラン。肩の力だけで体を滑らし、少しづつ亜紀雄の方に近づきながら、「亜紀雄様！　ご無事ですか？」

そうか。エンが消えたから、テリトリーも消えて声が通るようになつたんだ。聞こえるようになつたんだ。届くようになつたんだ。

亜紀雄は納得して、

「ああ……大丈夫」

少しづつ息を整えながら、静かに答える。

ふと、コツコツとこちらに近づいてくる足音に気付いて、亜紀雄は目線を上げた。目の前には、腕を組んで立ち尽くす東リーネ。口をへの字にした表情で、亜紀雄を見下ろしている。

「…………な、何だ？　今度はお前が相手になるつていうのか？」

「いえ。その気はありません」

首を水平に振りながら小さな声でそう言つと、リーネは身をかがめ、亜紀雄の前に転がっている日本人形をすくつよつと手に取つた。そして再度直立し、

「残念ながら私には精霊のような能力はありませんし、このままで私は私が直接スズランさんに攻撃しなくてはなりません。……教室でならともかく、敵としてスズランさんの攻撃半径に入るのは避けたいデスしね。私はそんな身の程知らずではありますよ」

「じゃあ

「……そうデスね、今日はこれで身を引きマス」

言いながら、リーネはフウツと深いため息をついた。

「保険の意味も込めて、精霊を一人も降ろしていたのに……。負けるなんて、ホント想定外デシタ。特に、小林さんにユネアを倒されたのが誤算デシタね。そのせいで、エンはスズランさんを抑えながらアキオを相手にしなくてはならないという、何とも不利な状況に陥つてしまいマシタから……。ユネアはアキオに対して十分な能力を割けませんデシタし、しかもアキオは札を持っていたわけデスし、ねまあ、それでも勝算はあつたはずなんデスが……アキオ、よくエンのエナジー・ポイントが分かりマシタね？」

「え？ そ、それは？」

「ウフフ。……別に言われなくても分かりマスよ。数時間相対したスズランさんなら、エナジー・ポイントくらい読んでいたでシヨウしそう。偶然にしては偶然過ぎる。マグレにしてはマグレ過ぎる。奇跡にしては奇跡過ぎる。恐らくそういうことなのでシヨウ？ ウフフン。とりあえずは、『おめでとうございます』と言つておきまシヨウか？」

肩を落とし、リーネは氣の抜けたような、力のない笑顔を浮かべる。

亞紀雄はスクツと立ち上がりながら、

「……しかしあ前はお前らは、スズランのことを諦めるわけじゃないんだろ？ 納得したわけじゃないんだろ？ そのうちまた襲つてくるつもりなんだろ？ 精霊を降ろしては、何度も僕達に

「

「いえ……。正直言うと、思い通り、狙い通り、理想通りの精霊を

「

降ろすには、私でも少し時間がかかるのデスよ。コネアもエンも、結構苦労して降ろしたんデスから。運がよくても一週間あるいは数ヶ月の間、どうにならない可能性もありマス。デスからまあ、スズランさんに対抗できる戦力を得るまで、再戦を挑むまでは少し期間が開くことになる　　といふことに　　しておいてください

「……しておいでください？」

違和感のある表現に、亜紀雄は首をかしげて聞き返した。

しかしリーネは、意識を亜紀雄からずらすかのように視線を外し、屋上の入口の方に顔を向けて、

「……とりあえず私にも、色々考えなければならないことがあるのデスよ」

まるでドアの向こうへ、階下の踊り場を睨みつけるように、瞳に鋭利な輝きを浮かべた。

「…………リーネ？」

「ま、とにかく！」

リーネは急にやたら明るい声音に変え、気分を切り替えるように、「今回は私の負けデス！　それは認めマス！　これで私は帰リマス！　そういうわけで、明日からはまたクラスメイトとして、よろしくお願ひしまス」

そう言つて、後ろに手を振りながら、リーネはドアから出て行った。

バタンッ

今夜、二人目の退場者。

あるいは、脱落者。

こうして屋上の人影は、残り一つになる。星空の下。急に静かな空気が流れる屋上

「亜紀雄様！」

スズランが声を上げた。

亜紀雄が振り返ると、スズランは依然碎かれた腕で上体を持ち上

げたまま、悔いるような後悔するような表情を亜紀雄に向けて、

「……今回も、本当に申し訳ありませんでした。私のせいでのことになってしまった。私の問題に亜紀雄様まで巻き込んで。亜紀雄様にまで迷惑をかけて。あまつさえ、亜紀雄様におケガまでさせてしまつて……。心底から悔いております。反省しております。もう一度と、このようなことは起こしませぬ。誓つて、同じ間違いは犯しませぬ。断じて、この舞は踏みませぬ。本当に申し訳ありませんでした。申し訳ありませんでした。申し訳ありませんでした。この償いには、私がこの身をかけて」

「スズラン」

スズランの謝罪を遮るよつて、亜紀雄はスズランの名前を呼んだ。そしてぐるつとスズランから顔を背け、街の夜景を眺めるような立位で、

「前から話ねつと思つてたんだけどわ」

「……はい？」

「君の言葉には、一つ、矛盾があると思つんだ」

亜紀雄はスズランに背を向けたまま、遠くに語りかけるよつて言ひ。

スズランは首をひねり、風にそよぐ亜紀雄の後ろ髪に聞いかけるよつて、

「わ、私の言葉に、矛盾……ですか？　ええと、それは？」

「……あの委員会の時、君はこいつ言つてたよね？　『僕の最期を看取るまで、僕の側にいる』って。……文章は少し違うかもしねいけど、そんなことを言つてた。そんな二コアンスのことを言つてた。確かに言つてた。宣言するよつて言つてた。ちゃんと覚えてるよ。そして、今日。僕の部屋で、君は何て言つた？　君は

「君は、『この身が滅ぼさうとも』って、言つたんだ」

「…………あつ……」

亜紀雄の言葉を認識し、亜紀雄が言おうとしていることを理解して、虚を着かれたような顔になるスズラン。

「……これは、どう考へても矛盾してるだろ？ 前者は、僕が先にいなくなる。だけど後者は、君が先にいなくなる。……これは、どうしたつて同時に起こりえないことだ。起こりえないこと、ありえないこと。もし……もし君が本気で、僕が死ぬまで僕の側にいようとするなら、君は滅んだりしちゃいけないだろ？ 消えちゃいけないだろ？ いなくなっちゃいけないだろ？ そんな風に自分を犠牲にしたりしたら、実現しない。約束が守れるわけがない」

風のような声で、諭すように亜紀雄は言葉を続ける。

「だからさ、君が自分の言葉に責任を持つなら…………あの宣言を守るって言うなら、君は君の事を勝手に諦めちゃダメだよ。勝手に傷つこいやダメだよ。勝手に苦しんじゃダメだよ。僕の側から勝手にいなくなっちゃダメだよ。勝手に消えちゃダメだよ。勝手に離れちゃダメだよ。…………それにさ、君が一人で勝手に傷つくるも、苦しむのも、僕は嫌なんだ。僕はそんなの見ていたくない。僕の側にいるって言つならなおさらだ。僕はそんなのは嫌だ。そんなのは僕の望むものじゃない。そんなのは僕の理想じゃない。多分…………多分だけど、僕の曾々曾じいさんもそう思つたから、そう思つたからこそ、君を側に置いておいたんじゃないのか？ 君を戦いの前線には置かなかつたんじやないか？ 君と一緒にいたんじやないか？」

「…………隆久様、も？」

「そう。だからさ…………君が約束を守るって言つなら…………あの宣誓を遵守するって言つなら…………僕が死ぬまで僕の側にいるって言つなら…………僕の最期を看取るまで僕から離れないって言つなら…………」

亜紀雄は、視線を落としながら振り返り、

「…………傷つかないで、苦しまないで…………消えないで」

スズランに言い聞かせるように、語りかけるように、説き伏せるように、懇願するように、哀願するように、祈願するように、悲願

かるよつて、そう言つた。

そう言つた。

スズランは、毎朝亞紀緒に見せていくような　あるいはそれ以上に　愛しむような、愛しむような、愛しむような、愛しむような、愛しむような、愛しむような、愛しむような、愛しむような、愛しむような、愛しむような、愛しむような、愛しむような微笑を浮かべて、

「かこい
『主』

あらじ

まりました、我が

ハローゲ

リリリリリリー

スズメが何の気兼ねもなくチョンチョンと鳴けるくらいに晴れ渡つた朝。亜紀雄の夢は電子音によつて途切れた。

リリリリリー

「…………む…………」

耳障りな音に顔を歪めながら、布団の中でモゾモゾともがく亜紀雄。しばらく右に左に寝返りを打つた挙句、亜紀雄は龜のように布団から腕を伸ばして、

リリリリ、リ…………

アラームを止めた。

そして再び腕を布団の中にじましこみ、「すりすり」と寝息をたて始める。

別段、亜紀雄は朝に弱いわけではない。毎朝目覚ましが鳴る前に目覚めるといつほどではないが、しかし起きたされればその時点で意識は大抵はつきりする。一度寝など、今まで数えるほどしかしたことがないかった。

だが、今日は違う。

朝だというのに、周囲は十分明ることこのうに、それでも亜紀雄のまどろみは晴れない。睡魔は消えない。やたら眠い。それもそのままである。

昨夜亜紀雄が眠りについたのは、明け方の四時。

家に帰ってきた時点すでに深夜二時を回つており、その後腹ごしらえなり何なりを終えた頃には、さらに一時間が経っていたのだ。いつも十一時には床につく亜紀雄には、大晦日以来の夜更かしであった。

加えて、目覚ましが指示示す現在時刻は、六時。

いつもの起床時間の一時間前である。

それというのも、今朝は体育委員の仕事が急きょ増えたからである。昨夜はあんなことがあったというのに、他の事など考えてられないような日に遭つたというのに、寝る直前になつて思い出したのだった。花塚まいみがわざわざ家を訪ねてきて、伝えてきたことを無視してしまおうとも思ったが、これ以上村雲教諭の機嫌を損ねるとどうなるか分かったものではなかつたので、仕方なく目覚ましの時間を早めたのであつた。

だが、いざ朝になると起きる気にはなれない。

これほど強烈な睡魔に抗う術を、亜紀雄は知らなかつた。結局、目覚ましが鳴る前のよつた、目覚ましなんて最初からセツトしていなかつたのではないかとでも言つような、幸せそうな熟睡風景が続いている。スズメの鳴き声と寝息の一重奏だけが響いている。と、そこへ

「主 つ。朝ですよーつ」

扉が開き、スズランの明朗な声。彼女も亜紀雄と同じ あるいは、それよりも數十分睡眠時間を削つてゐるくらいの タイムスケジュールで朝を迎えたはずだが、しかしその顔には眠氣も疲労も浮かんでいない。いつもの朝、もしくはいつも以上に晴れやかな朝の様相であった。

朝日に負けないくらいのまぶしい笑顔を浮かべたスズランは、亜紀雄のベッドの方へ近づいていつて、

「さつ、主。起きてください」

背中を揺らしながら声をかける。

しかし亜紀雄は、布団の中で鬱陶しそうな顔をして、

「…………うん……」

「じゅんと体を回転させて、スズランに背中を向けた。

「主、遅れますよ?」

「…………むん……」

「朝食はもつでできるんですから、それ」

「……む むん……」

「つめき声しか返つてこない。」

スズランは腰に手を当てて「もつ」 と息を吐き、再度亜紀雄の背中を揺すつて、

「ほら、また先生に怒られてしまいますよ?」

「……む む……」

「起きてください」

「……むーん……」

「一言」と、耳に近づいてくるスズランの声。夢のままの中、亜紀雄の脳裏に嫌な予感が駆け巡った瞬間

頬に、生暖かい感触。

「 うひつ」

亜紀雄は飛び起きた。

「な、ぬ、あ、スズラン、今、何し 」

「うふふ。ドラを取り上げられてしましましたからね。次はどんな方法にしようかと考えていたのですが、やはり『押してダメなら引いてみる』だらうと」

言いながら、胸を張るスズラン。

「……だ、だからって 」

「効果でき面のようですし、しばらくなこの手でこきましようか、うふふ さ、パンももう焼けてますから、早く降りてくださいね」

やたら嬉しそうな顔で言いながら、スズランはドアへと進んで行く。

スズランが廊下へと足を踏み出したとした間際、その背中を眠気眼でぼんやりと眺めていた亜紀雄は、思い出したように、

「……そうだ、スズラン。体はもう大丈夫なのか? 昨夜は応急処置しかしなかつたけど」

「はい、何も問題ありません。すこぶる快調です。まあ、憑いてし

まえは人形の亀裂などほとんど関係ありませんし。それに、昨夜主が手ずから処置してくださった肢体ですから」

「……やめろ、そういう誤解を招くような表現は」

「うふふふふ

まるで本日が人生最良の日であることを確信したかのように、どこでも楽しそうに笑いながら、スズランは部屋から出て行つた。亞紀雄はのつそりとベッドから這い出し、クローゼットを開きながら、

「……まあ、日常は日常だから幸せつてことかナ」
呟くよつな、独り言。

校庭のライン引きを遂行し、

朝だというのに結構な疲労感を感じつつ、ぱらぱらと登校してきた生徒達に混じつて、亞紀雄も自教室にたどり着いた。

まだ数人しかいない一年三組のクラスルーム。

カバンの中身を机の中に移し替え、ようやく一息つけると、亞紀雄は椅子にどかりと腰を降ろした。

ふと教室の後方に目を向けると、机に片肘をついている小林雑音。大きな口を開けて、あくびをしている。

亞紀雄は、周りの人間がこちらを意識していないのを確認すると、本日の授業の確認をしているスズランにも気づかれないように、雑音の方へそつと近づいていつて、

「……小林君」

「ん？ ああ、お早う、鞆河君」

「お早う。…………あの、昨夜は本当にありがとう。もし君が居なかつたら、どうなつてたか」

「はは、別にいいよ。言つたでしょ？ あれは恩返しだって」

「あ、ああ。そうだつたね。…………でも、前から疑問だつたんだけど、恩返しつて一体僕は君に何を

「 小林君！」

突然の会話への乱入者。女子生徒の声である。

亜紀雄と雑音が同時にそちらへ顔を向けると、そこには肩を怒らせた東香々美が立っていた。カバンも置かず、頬を膨らませてこちらを睨んでいる。

雑音は狼狽しつつ、頭上にハテナという文字を浮かべながら、

「 …… 東さん？ どうしたの、朝っぱらからそんな怒つて？」

「 どうしたものかしたもないわよ！」

香々美は依然言葉に怒気を含ませて、

「 ちょっと、何なのよ！ あのホワイトデーのお返しは！ 開けてびっくりしたわよ！」

「 ホワイトデーの？ って、昨日渡したやつ？ あれ、そんなまづかったか？ …… でも、君がくれたのだって結局義理チヨコだつたんだから、そこまでハイレベルなのを期待されても」

「 何でモンブランケーキなの！」

氣圧を変動させるかのような、香々美の怒鳴り声。

雑音は豆鉄砲を食らったような顔で、

「 …… は？」

「 よりにもよつて、栗嫌い歴十六年の私に、モンブランケーキを送りつけるとは！ どんな嫌がらせよ！ 折角チョコ上げたのに！ 恩をあだで返されて砂まで引っ掛けられた気分だわよ！」

「 だわよ、って …… というか、君は栗嫌いだったのか？ いや、そんなの知らなかつたんだ。悪かったよ。それは完全に不可抗力なんだ」

「 まったく、リサーチが足りてないわ！」

田を逆八の字にして、ふいっとそっぽを向く香々美。ふと、片目を開けて雑音の方を見やり、

「 …… 小林君、反省してる？」

「へ？」

「反省してゐるかつて聞いてゐるの」

「いや、まあ、嫌いなもん渡しちゃつて、悪かつたなー、とは思つてるよ」

「だったらその贖罪で、ここに連れてつて！」

言つが早いか、香々美はぱつと雑音の田の前にへら紙を差し出してきた。

雑音はそこに書いてある文字を見つめ、

「……何、これ？」

「読めば分かるでしょー。ケーキバイキングよ、ケーキバイキング！三十種類のケーキが食べ放題なのよ！ 小林君、私をここに連れてつて。もちろんおごりで！」

「な、何だそりやー！」

叫ぶ雑音。

「ちょ、そりやあ話が飛躍しすぎだろー、聞いてないつて！ 何だよ、これ。参加費五千円じゃないか！ しかもこれ、店の場所が結構遠いしー。片道だけで電車賃千円以上かかるぞー！」

「これぐらいしてもらわないと」

「割に合つかー！ 義理チヨコのお返しに、何で貯金を切り崩さなければならぬんだ！ ふざけるな！ こんなのは、僕は断じてゴメンだぞー」

「……ふーん。私を連れて行く気はない、と」

「当たり前だー！」

「……なるほどー、そつかー、そうですかー……」

冷めた声で、思わずぶりなイントネーションで言つ香々美。背中で手を組み、視線を下に向けて、

「……じゃあ、私、今後一切、あなたに数学の宿題見せないわよ？」

「な……！」

「しかも、それだけじゃないわ。古文も世界史も、化学も見せてあげない。もちろん、夏休みも冬休みもね？」

「な、何と言つ…………」

雑音は顔面蒼白で、がたりと床に崩れ落ちた。

どうやら、

氷の精靈すら瞬殺するこの男の弱点は、数学と古典と世界史と化学だったようである。

「……さあ、小林君。もう一度聞くわ。私を、このケーキバイキングに、連れて行つてくれる?」

「くつ…………」

雑音は肩をわななかせ、

「…………勝手にしろ」

「わーい、やたーっ! これ、絶対約束よ! 今週の土曜日ね!

待ち合わせ場所と時間は後で連絡するから!」

そう言つて、満面の笑みで手を頭上でぶんぶん振りながら、自分の席へと帰つていく香々美。

とりあえず、今週末に決定されたこの一人のデートに心にもない祝福を贈りながら、額から冷や汗を垂らしつつ、亜紀雄は雑音の席からそつと離れた。

いつも通りの英語、数学、体育、地理の授業を乗り越え、やつと迎えた昼休み。

スズランお手製の弁当を数分で平らげ、「ううううううう」といながら弁当箱をカバンにしまいこんだ亜紀雄は、「おそまつ様です」と理想の奥さんの微笑を返してくるスズランに、

「ちょっと、行つてくる

「どこへですか?」

「ヤボ用。数分で戻るから

それだけ言つて、亜紀雄は教室から出て行つた。

亜紀雄が向かつたのは、体育館裏。

学校を取り囲む塀と体育館の壁にはさまれた、ジメジメした場所。日もほとんど差さない寂しい場所で、ここを通る生徒もまったくい

ない。ある。

亜紀雄がそこにたどり着くと、すでに先客がいた。

これが自分のアイデンティとでも言つよう、いつも通りのポーテールを提げた女子生徒。手持ち無沙汰なように足で地面に絵を描いている、花塚まいみである。

まいみは、ようやく現れた亜紀雄に気付き、

「もう少しうまいですよー！」

「ああ、ごめん」

頭をかきながら、謝る亜紀雄。

休み時間に廊下ですれ違つた際、昼休みにここへ来るよう呼び出しておいたのであった。雑音の時は周囲にほんんど人がいなかつたが、しかしあれは偶然そつただけでまいみとまた同じ状況になる可能性は極めて低いからである。

しかも、雑音はわざわざあんなところに現れたことから考へていくらかわけを知つていたのかもしれないが、このまいみがスズランに関する何やらかんやらを知つている可能性は低い。人がいる手前で、大声で理由やら原因やらを尋ねられたら敵わんということでのような人気のない場所に呼び出したのだった。

「あ、で、その、話つて言つのは　いや、何て言つたらいいのか、いまいちよくわからないんだけどわ」

「まったく、告白なら早くしてくださー！　回りくどいですよー！」

「……へ？」

亜紀雄は目を点にした。

「…………告白？」

「もう、こんなありきたりな場所に呼び出されたら、それくらい分かりますよー！　まったく。言いたいことがあるならさつさと言つてください！」

「……いや、あの……その……告白じゃ、ないんだけど……」

「……へ？」

今度はまいみが目を点にした。

「いや、告白とかじゃなくて、昨日のお礼をと思つてネ。その、君の言葉は胸に響いたというか、刺さったというか。…………実際、君がハツパをかけてくれなかつたら、僕はそのまま諦めてただろうしね。助けられたんだ。だから、凄く感謝してる。本当 ありがとひざいました」

言いながら、亜紀雄はぺこりと頭を下げる。

「そ、そそ、そうですか！」

まいみは慌てた顔になり、顔を明後田の方に向けて、「べ、別に私はハツパをかけたとかそういうんじゃなく、ただあなたの心をなぞつただけですから、そんな感謝されるいわれはないんですね……まあ、まあ、一応受け取つておきましょう よ、用はそれだけですか？ だ、だつたら、私は次の授業の準備をしなきゃならないので、わざ、先に帰ります」

そう言って、そそくさと立ち去る。するまいみが裏道から出ようとしたら、

「…………花塚さん」

亜紀雄は呼びかけた。

まいみはひよこんと振り返り、

「は、はい？ 何ですか？」

「…………もし もし、今、僕が本当に君に告白したとしたら、返事はどうちなんですか？」

亜紀雄は、考えもなしに、何となく、ビクビクともなく、聞いてみた。

しばらく亜紀雄の顔をじっと見ていたまいみは、顔を前に戻し、

「…………そんなの、今答えてもしょうがないじゃないですか」

「…………そりやそうダ」

「じゃ、また」

そう言つて、まいみは校舎へと帰つていつた。

一人残された亜紀雄は、呟くように、

「…………花塚さん、別に、人の心が読めるつてわけじゃないのか

な？」

現代文、物理の授業を乗り越え、あつといつ間に、あることはようやく訪れた下校時刻。

部活に所属している生徒はすでに部室やグラウンドや体育館に向かっており、帰宅部の人間ばかりが帰り際の談笑を催している中、カバンを膝元に提げたスズランが、いつもの質問を亜紀雄にしようとして

「さ、帰りましょうか、主。今夜の夕飯は一体何を」

「アキオーッ。一緒に帰りませんか？」

スズランのセリフは、リーネの声に遮られた。

「駅前に新しい喫茶店ができたらしくて、そこのパフェが絶品らしいのです。ちょっと寄っていきまセー」

「リーネさん？」

ひょっこりと亜紀雄とスズランの間に顔を出したリーネに、スズ

ランはおどりおどりしい聲音で、

「……あなた、昨日の今日で、よくもまあそんな風に主に話しかけることができますね？」

「昨夜言つたじゃない『スカ』。『クラスメイトとしてよろしくお願いします』つて」

「それにしたつて、あなたは私の命を狙つている者なのですから。そうそう気を許してはおられませぬ」

「ウフフ。敵と言つても、それは当分先の話『スカ』よ」

「……どうだか。我々を油断させるための口上じやないんですか？」

「ホント『スカ』よ。 実際、今の私には、それよりもっと重要な『ト』があるの『スカ』」

そう言いながら、スズランにも気取られない程度の僅かな動作で、リーネは視線を教室の後方へ向けた。その瞳の先には、自分の席に座り、東香々美と談笑している

リーネはふつとスズランの方に意識を戻して、

「それに、それだけではないの『デス』」

「それだけじゃない？ あなたが主に話しかけてきて、私に突つか
かってくる理由が、他に何があるというのですか？」

「ええ、ありマスよ。おおり『デス』」

リーネは首を少し横に傾け、「ウフフン」と笑いながら、

「あなたは、私の恋敵なの『デス』」

けろっとした表情で、そう言った。

ちなみに、現在の教室の状況を説明すると、亜紀雄の席が教
室の中ほどにあるおかげで、当然のごとくこの会話も部屋の中心で
行われている。しかも、現時点では部屋の中にいる生徒はほどよい人
数で、周囲はそこまでうるさくもやかましくもなかった。おまけに
今のリーネの声量はなかなかに大きくて、加えて言うなら他のクラ
スから遊びに来た生徒まで数人居合させており

ようは、大多数の生徒に今のセリフを聞かれたのだった。

明日には学年中、そして一週間後くらいには学校中に知れわたっ
ていることだろう。

今のリーネのセリフが、実はスズランが亜紀雄の恋人であること
が前提で放たれていることも捨て置きがたい。

「ちょ、あ、あなた！ な、何を言つてますか！」

「ウフフ。言葉の通り『デス』よ～」

というスズランとリーネのわめき合いを聞きながら、亜紀雄はぐ
たりと机の上に覆いかぶさり、ハアとため息をついた。

『歩くマイナス極』

『死の精霊』あさな

双方共に、人にとって願い下げな字あさなである。ネガティブでしかな
い響き。マイナスイメージな言葉。嫌われ、疎まれるに足る存在。

嫌われ、疎まれる存在でしかない。

しかし、

そんな二人が一緒にいるなら、共に歩んでいくなら、どうにかなるかもしれない。どうにでもなるかもしない。マイナスかけるマイナスがプラスになるように、結果はプラスになるかもしない。明るいものになるかもしない。幸せなものになるかもしない。

スズランと僕が共にいるならば、未来は輝いていく。

亜紀雄はそんなキレイ事で、キレイ事にも似た気休めで、キレイ事に似た戯言で納得しようと思っていたのだが

「あつ、そうデス、アキオ。今日はウチに泊まつていきまセンか？
そうしまシヨウ。何なら、私がアキオの背中を流してあげマ
「主！ こんなのは放つておいて、さつさと帰りましょう！ ……
…… そうだ！ 今日は特別に私が添い寝して、寝物語を読んで差し上げ
「もう、止めてくれーつ！ 周囲の視線が痛いんダッ！」

『歩くマイナス極』 鞘河亜紀雄は、どっちがプラスでどっちがマイナスなのか、どっちがポジティブでどっちがネガティブなのか、どっちが正で負なのか、もはや分からなくなりながら、見当もつかなくなりながら、それでも困りつつ、戸惑いつつ、笑いつつ、はしゃぎつつ、今日から明日へと、現在から未来へと

スズランと一緒に、歩いていく。

スズランとマイナス END

Hペローグ（後書き）

後書き

というわけで『スズランとマイナス』でした。

本作は、三人称表現で、過去のキャラを使いつつ、普通のお話を書こうとした物語です。結果的に普通のお話になつたのかはよくわかりませんが、元々はもっと薄っぺらい話にするつもりだったのですが、思ったよりキャラクターが頑張ってくれました。結構気合が必要でした。

次は東リーネを主人公にした作品でも書いてみようとも思つたんですが、先のことはどうなるか分かりません。それよりもまず連載中小説を、と……。この作品で、式織の三人称表現に関しては、自分評価で一応及第点に届いたかなと思うので、そろそろまた一人称作品に立ち向かおうと思っています。

ともあれ、拙作にお付き合いいただきありがとうございました。
また何かの折に再会できればと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8166d/>

スズランとマイナス

2010年10月8日15時03分発行